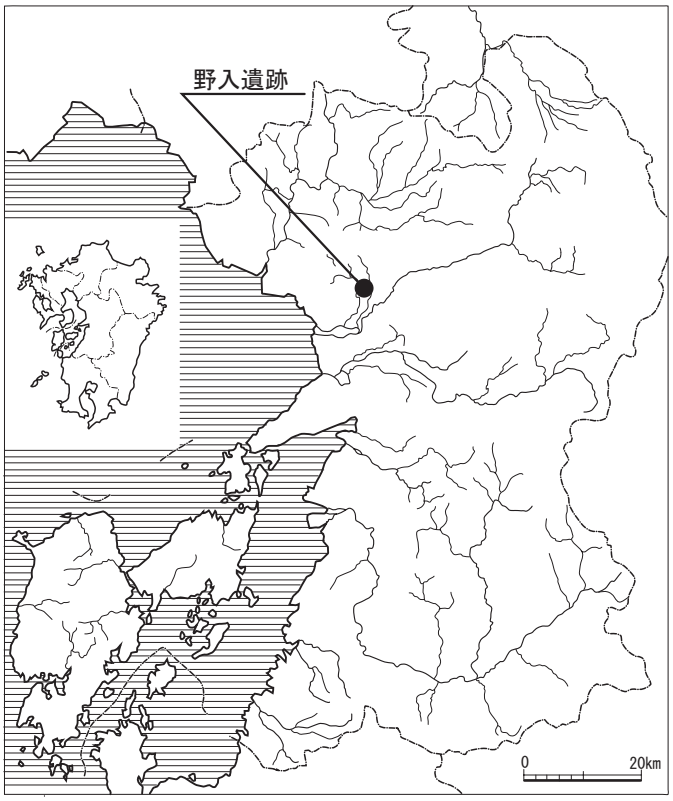
熊本県文化財調査報告　第 312 集

野入（のいり）遺跡

県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査



熊本県教育委員会

2015. 3

序　　文

熊本県教育委員会では、熊本県土木部による県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴い、予定地内の埋蔵文化財発掘調査を実施しました。

本書は、熊本県熊本市北区植木町に所在する野入遺跡の発掘調査報告書です。

野入遺跡は古代の集落跡を中心とする遺跡で、それ以外に、縄文時代の遺物が出土しました。

集落を構成する主なものは、地面を掘り下げた半地下式の竪穴建物と地面の穴の中に柱を立てた掘立柱建物です。この時代の食器類である灰色をした窯で硬く焼かれた須恵器や褐色をした素焼きの土師器も出土しました。

今回の発掘調査で得られた成果は、植木地域の集落の要素や変遷を考えるうえで、大変貴重な資料です。

本書が学術資料としてはもとより、郷土の歴史に対する理解を深める資料として活用され、ひいては、子どもたちのふるさとを大切にする心の育成、または教育・文化の向上の役割を担うことができれば幸いです。

最後になりましたが、埋蔵文化財発掘調査にご理解、ご協力をいただいた地元の皆様をはじめ、植木町教育委員会、熊本市教育委員会、事業主体である熊本県土木部に対し、心より感謝申し上げます。

平成 27 年 3 月 31 日

熊本県教育長　田　崎　龍　一

例　　言

1. 本書は、熊本県鹿本郡植木町大字鐙田字野入（現住所：熊本市北区植木町）に所在する野入遺跡の発掘調査報告書である。
2. 県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う調査として、熊本県教育庁教育総務局文化課が熊本県鹿本地域振興局土木部工務課から依頼を受け、平成 20 年度に発掘調査を行い、平成 24 ～ 26 年度に整理作業を実施した。
3. 本文の執筆は西住欣一郎が担当した。
4. 遺構の実測は、株式会社九州文化財研究所に委託し、写真撮影は発掘調査担当者が行った。
5. 遺物の実測は、整理担当者が行い、一部は株式会社九州文化財研究所に委託した。
6. 遺物の写真撮影は、村田百合子、松本智子、蓮池千恵が行った。
7. 鉄斧の保存処理は、大塚トシ子、小野美香、花田美佳が行った。
8. 本書の編集は、熊本県教育庁教育総務局文化課で行い、山下義満、西住が担当した。
9. 本書に掲載した資料は、熊本県文化財資料室で保管している。

凡　　例

1. 平面図に掲載している座標については、世界測地系（日本測地系 2000）を使用している。図面中の方位はこの座標北を示している。
2. 本報告書に掲載した実測図の縮尺は、各実測図に表示している。
3. 本報告書に掲載した遺物の縮尺は以下のとおりである。土器・鉄斧：1/3、石器・石製品：2/3、支脚：1/5
4. 色調については『新版　標準土色帖』1967　農林水産省農林水産技術会議事務局監修によった。陶磁器については、大日本インキ化学工業株式会社発行「中国の伝統色」第 2 版（1986）を用いた。

本　文　目　次

第Ⅰ章　調査の経過
第１節　調査にいたる経緯…… 1
第２節　発掘作業の経過…… 1
第３節　整理作業の経過…… 2
第４節　調査の組織…… 2
第Ⅱ章　遺跡の位置と環境
第１節　地理的環境…… 5
第２節　遺跡周辺の歴史的環境…… 5
第Ⅲ章　調査の方法と成果
第１節　調査の方法…… 8
第２節　層序…… 8
第３節　遺構…… 9
第４節　遺物…… 36
第Ⅳ章　総括…… 42

挿　図　目　次

第１図　周辺遺跡分布図…… 7
第２図　調査区地形測量図及びグリッド図…… 11-12
第３図　基本土層図…… 13
第４図　１区　遺構配置図 …… 15
第５図　１区　SI-001 ～ 005 実測図及び出土遺物実測図…… 17
第６図　１区　SI-002 竈実測図及び出土遺物実測図…… 18
第７図　１区　SI-006 実測図…… 19
第８図　１区　SB-001 実測図…… 20
第９図　１区　SK-001 ～ 004・006 ～ 008 実測図及び出土遺物実測図 …… 21
第 10 図　１区　SX-001 実測図及び SF-001 実測図…… 22
第 11 図　２区・３区　遺構配置図…… 24
第 12 図　２区　SI-001 実測図及び出土遺物実測図 …… 25
第 13 図　２区　SI-002 実測図 …… 26
第 14 図　２区　SI-002 竈実測図及び SI-003 竈実測図…… 27
第 15 図　３区　SI-001 実測図及び出土遺物実測図 …… 29
第 16 図　３区　SI-001 二枚目硬化面範囲図・完掘図・貯蔵穴実測図及び出土遺物実測図 …… 30

第 17 図　3 区　SI-001　P2 ～ 4 断面図・竈実測図及び出土遺物実測図 …… 31
第 18 図　3 区　SI-002 実測図及び円形周溝状遺構実測図 …… 32
第 19 図　3 区　SB-001 実測図 …… 33
第 20 図　3 区　SB-002 実測図及び SD-001 実測図…… 34
第 21 図　3 区　SK-001 ～ 003・SX-001 実測図 …… 35
第 22 図　1 区　出土遺物実測図 …… 38
第 23 図　2 区　出土遺物実測図 …… 39
第 24 図　3 区　出土遺物実測図 …… 40
第 25 図　1 区～ 3 区　出土遺物実測図 …… 41

表　目　次

第 1 表　周辺遺跡一覧表…… 6
第 2 表　遺構一覧表…… 47
第 3 表　出土遺物観察表…… 49

図　版　目　次

Ph. 1…… 53
調査区 全景 南上空より
Ph. 2…… 54
1 区 SI-001 ～ 005 完掘状況 東より・1 区 SI-002 竈完掘状況 南東より・2 区 SI-001 生活面完掘状況 南より
Ph. 3…… 55
2 区 SI-002 生活面完掘状況 南より・3 区 SI-001 生活面完掘状況 東より・3 区 SI-001 生活面完掘状況 東より
Ph. 4…… 56
3 区 SI-001 竈最終使用時完掘状況 東南より・3 区円形周溝状遺構完掘状況 北より
Ph. 5…… 57
1 区出土土器 (1)・1 区出土土器 (2)
Ph. 6…… 58
1 区出土土器 (3)・1 区出土土器 (4)・2 区出土土器 (1)・2 区出土土器 (2)
Ph. 7…… 59
3 区出土鉄斧・3 区出土土器 (1)・3 区出土土器 (2)
Ph. 8…… 60
3 区出土陶磁器・3 区 SI-001 出土竈支脚
Ph. 9…… 61
3 区出土石製品・3 区出土土偶・1 ～ 3 区出土石器

第Ⅰ章　調査の経過

第1節　調査にいたる経緯

熊本県教育庁文化課（当時の組織名）と熊本県鹿本地域振興局土木部工務課（当時の組織名）は、平成19年度当初に、県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う鹿本郡植木町投刀塚（当時の地名）区域にある野入（のいり）遺跡の保存について協議を行った。協議の結果、計画通りに工事を施工することになり、遺跡の保存ができなくなった。それで、記録保存発掘調査を前提とした確認調査を実施することになった。

確認調査は、熊本県鹿本地域振興局長から、平成19年11月14日付け、鹿本工第35号で埋蔵文化財の予備調査の依頼を受けて行うことにした。確認調査は文化財調査第2係の木村元浩参事、廣田静学参事の2名が担当し、長さ400mの道路工事予定箇所で行った。

確認調査は平成19年12月19日・20日、遺跡の地下の状況を確認する目的で実施した。確認のために6箇所にトレンチ（細長い溝状のもの）を設定し、地面の掘削を行った。これらのトレンチのうち、3箇所で、縄文時代から古代にかけての遺構・遺物を確認した。この確認調査の結果については、平成20年3月6日付け、教文第1987号で、鹿本地域振興局長に通知し、工事に先立って文化財保護法第94条の規定に基づく埋蔵文化財発掘の通知が必要なことも伝えた。

上記の通知を受け、工事主体者である熊本県知事から文化財保護法第94条第1項の規定により平成20年9月25日付け、鹿本工第27号で埋蔵文化財発掘の通知があった。この通知を受け、県文化課は平成20年10月3日付け、教文1602号で、工事主体者に工事着手前に発掘調査の実施を指示した。

これにより、文化財保護法第99条第1項の規定により、平成20年10月31日付け、教文1866号で、野入遺跡の調査主体者が熊本県教育長であり、発掘担当者は県文化課文化財調査第1係参事長谷部善一、学芸員前田真由子であることを熊本県教育長に通知した。

第2節　発掘作業の経過

⑴ 調査区の設定

記録保存発掘調査を実施した野入遺跡は、鹿本郡植木町大字鐙田字野入992、993、994、996、1001に所在している（調査当時の住所であり、現在は合併により熊本市北区植木町に変わっている。）発掘調査は平成20年11月11日に開始し、平成21年3月25日まで実施した。

調査区はほぼ東西方向に細長く伸びているので、発掘調査業務を円滑に進めるために、調査区を1区・2区・3区に分けて行った。2区と3区は一続きの区域であるが、調査区を横切る畦の北側区と南側区とでは高低差があり、段になっていた。それで、畦を境に北側を2区、南側を3区とした。2区の東端部より約60m東側に離れた箇所に1区を設定した。調査面積は調査区の下端で、1区が約402㎡、2区が約384㎡、3区が約1072㎡である（第2図）。

⑵ 調査の進行状況

1区では重機による表土剥ぎを平成20年11月11日・12日に行った。その後、11月13日から、人力による遺物包含層の掘り下げ、遺構検出、遺構掘り下げ等を行い、必要に応じて、写真撮影、実測等の業務を実施した。

2区・3区は平成20年12月2日から12月8日まで、重機による表土剥ぎを行った。3区では12月10日から、2区では平成21年1月22日から、人力で遺物包含層の掘り下げ、遺構検出、遺構掘り下げ等を実施し、状況に応じて写真撮影、実測等の業務を行った。

第 3 節　整理作業の経過

整理作業は熊本県文化財資料室（熊本市南区城南町沈目 1667）で行った。作業は平成 24 年度から平成 26 年度に実施した。実施にあたっては、他の事業の整理作業との調整を行い、実施可能な範囲内で実施した。

平成 24 年度の整理作業は、出土遺物の水洗い、注記、接合を行った。平成 25 年度は出土遺物の接合、遺物実測を行い、遺物・遺構実測図のトレースも並行して実施した。平成 26 年度は版面のレイアウト、遺物写真撮影、執筆作業を行い、報告書の印刷製本を行った。

第 4 節　調査の組織

発掘調査及び整理作業の組織は下記のとおりである。

【発掘調査】（平成 20 年度）

調査主体　熊本県教育委員会

調査責任者　米岡正治（文化課長）

調査総括　江本　直（課長補佐）

西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）

調査担当　長谷部善一（参事）

前田真由子（学芸員）

調査事務　宗村士郎（教育審議員兼課長補佐）

川上勝美（主幹兼総務係長）

山田京子（参事）

高松克行（主任主事）

調査作業員　荒木照之・荒木康利・石川幹朗・井上育誠・井上咲雄・今村東亜子・君恵朋広・木本勝雄・田添幸子・徳永幸代・徳永良弘・中村静代・中村　勝・仲山サチ子・仲山睦郎・西嶋喜久代・西村信二・野仲朗怡・林　弘子・平山竹次・廣瀬悦子・眞村俊昭・森山一人

【整理作業】（平成 24 年度・平成 25 年度・平成 26 年度）

整理主体　熊本県教育委員会

整理責任者　小田信也（文化課長）平成 24・25 年度

手島伸介（文化課長）平成 26 年度

整理総括　西住欣一郎（主幹兼文化財調査第二係長）平成 24 年度

西住欣一郎（課長補佐）平成 25・26 年度

岡本真也（文化財調査第二係長）平成 24 年度

岡本真也（主幹兼文化財調査第二係長）平成 25・26 年度

整理担当　山下義満（参事）

西住欣一郎（課長補佐）平成 26 年度

坂本千恵（非常勤職員）平成 24・25 年度

春川香子（非常勤職員）平成 24 年度・平成 25 年度・平成 26 年度

出家麻里（非常勤職員）平成 25 年度

今田里枝（非常勤職員）平成 26 年度

整理事務　川上勝美（課長補佐）平成 24 年度

馬場一也（課長補佐）平成 25 年度

松永隆則（課長補佐）平成 26 年度

中津幸三（課長補佐・施設課総務・助成担当）平成 24 年度

廣石哲哉（主幹兼総務・文化係長）　平成 25・26 年度

稲本尚子（施設課総務・助成係参事）平成 24 年度

天草英子（施設課総務・助成係主任主事）平成 24 年度

有馬綾子（参事）平成 25・26 年度

天草英子（主任主事）平成 25・26 年度

整理作業員　境美惠子・濵﨑清子・園田智子・青木美代子・青山玲子・藤田繁子

紫垣博子　平成 24・25・26 年度

一野幸枝・清田幸恵・村田明恵・田中洋子・甲斐啓子・丸山勉・畑島明美

内村尚美・颯々野ふみ　平成 24・25 年度

立岩恵美子　平成 26 年度

第Ⅱ章　遺跡の位置と環境

第１節　地理的環境

野入（のいり）遺跡は、熊本市北区植木町鐙田野入に所在する。熊本市は熊本県のほぼ中央部に位置している。熊本市の西端は有明海に面しており、東端は阿蘇山地から派生した丘陵などに立地する菊陽町、益城町に接している。当遺跡が立地している植木町は熊本市の北部にあり、町の大半が植木台地上に位置する。

この植木台地は熊本市の北方から東方にかけて広く広がる肥後台地（熊本台地）と呼ばれる西端を形成している。台地の北西側には合志川が、南西部には井芹川が流れている。台地の西端部は国見山（388.7 m）と三ノ岳（681.5 m）から派生している丘陵に接している。この台地は標高約 60 m～約 100 mで、東西の幅約 3.5km、南北の長さ約 9.5kmの縦長であり、南側に緩やかに低くなっている。この細長い台地のほぼ中央部を国道 3 号線が南北に貫く状態になっている。台地のほぼ中央部に国道 3 号線を夾むような状態で、西側に平尾山（215.7 m）、東側に岩野山（217.4 m）が対峙している。

この台地を地質的に見ると、火山灰、火山礫などの火山性のものが堆積しており、その基盤には阿蘇溶結凝灰岩がある。そのため、水の浸透性が大きく、地下水位が低く、水を確保するには深い井戸が必要であった。

(参考文献)

原口長之「序章　植木町の概況」『植木町史』1981 年

第２節　遺跡周辺の歴史的環境（第１図・第１表）

今回発掘調査を実施した野入遺跡を中心にして、その周辺に分布する遺跡を北側、西側、南側に分けて概観する。

当遺跡の南側には、同じ台地上に位置する弥生時代と平安時代の包蔵地である北中尾遺跡がある。また、当遺跡の南西側には低地が広がっており、その部分に沖遺跡、腹佛長遺跡が存在する。沖遺跡及び腹佛長遺跡は縄文時代、平安時代、中世の包蔵地である。その低地の中に独立丘陵状を呈する地形に、鐙田中尾遺跡がある。この遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代、中世の包蔵地である。

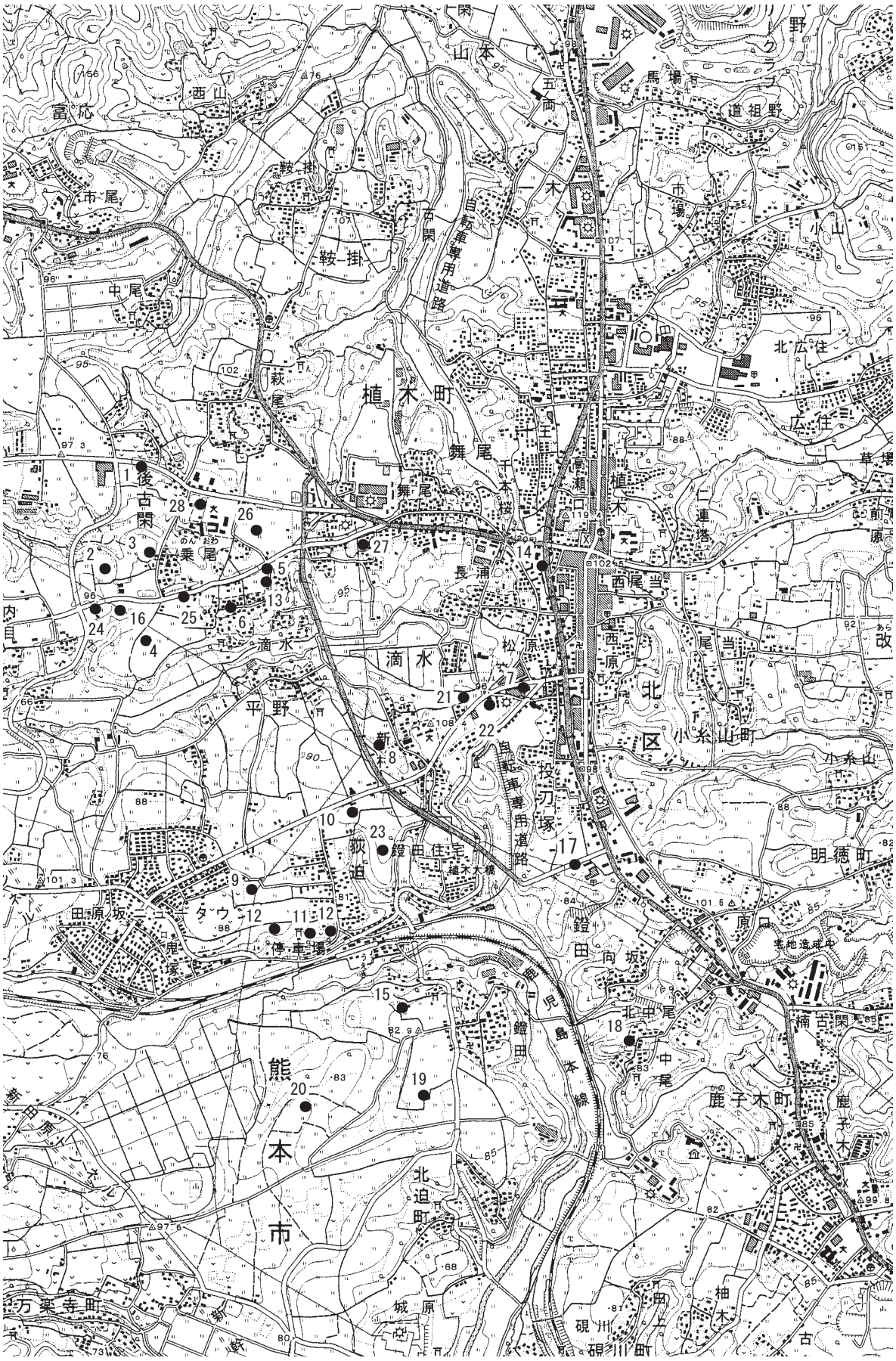
当遺跡の西側から北西側にかけての同一台地上に様々な遺跡が立地している。西側には四ッ塚遺跡、荻迫遺跡、鬼のかま古墳、荻迫狐塚古墳、荻迫柿木台場薩軍墓地がある。四ッ塚遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代の包蔵地である。荻迫遺跡の中心となるのは弥生時代後期の集落跡である。鬼のかま古墳は 2 基あり、円墳で内部主体は横穴式石室である。荻迫狐塚古墳は円墳で、以前は外堤が存在していた。荻迫柿木台場薩軍墓地は明治時代の西南戦争関連遺跡である。この周辺は西南戦争の戦場となっている。北西側には投刀塚堀ノ内遺跡、滴水古閑原遺跡、東中原遺跡、平野五輪塔群がある。投刀塚堀ノ内遺跡は縄文時代、平安時代の包蔵地である。滴水古閑原遺跡は弥生時代、平安時代の包蔵地である。東中原遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代、中世の包蔵地である。平野五輪塔群からは中世の五輪塔片が多数発見されている。

当遺跡の北側には投刀塚古墳、町裏遺跡があり、北西側には加川原遺跡、滴水東屋敷の板碑、滴水館遺跡、滴水館跡、内山遺跡、滴水西原遺跡、大道端遺跡、乗尾遺跡、轟遺跡、轟今古閑遺跡、城之内古墳、尖り遺跡、塔ノ本遺跡などがある。投刀塚古墳は円墳であるが、内部主体等の詳細は不明である。町裏遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代の包蔵地である。加川原遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代の包蔵地である。滴水東屋敷の板碑は室町時代の石造物で、享禄 3 年（1530 年）、天文 2 年（1533 年）の銘がある。滴水館遺跡は縄文時代～中世の包蔵地である。滴水館跡は中世の城館跡であり、土塁が残って

いる。内山遺跡、滴水西原遺跡は縄文時代、弥生時代、古墳時代、平安時代などの包蔵地である。大道端遺跡は縄文時代、弥生時代、平安時代、中世の包蔵地である。乗尾遺跡は弥生時代の包蔵地である。轟遺跡、轟今古閑遺跡は弥生時代、古墳時代、平安時代の集落跡であり、轟遺跡からは銅鉾４本などが出土している。尖り遺跡は縄文時代～近世の包蔵地であるが、主体となるのは弥生時代中期の集落跡である。塔ノ本遺跡は旧石器～中世の複合遺跡であるが、甕棺墓、支石墓などを確認しており、ここから出土した越州窯青磁水注は貴重なものである。

遺跡番号	遺　跡　名	種　別	所　在　地	時　　代	出　土　遺　物	備　　考
1	塔ノ本遺跡	包蔵地	轟塔ノ本	旧石器・縄文・弥生・奈良・平安・中世	縄文土器・弥生甕棺・平安土師器・青磁・布目瓦・火鉢	支石墓・甕棺群・土壙墓・越州窯青磁水注
2	轟今古閑遺跡	集落跡	轟今古閑	弥生・古墳・平安	弥生土器・古墳須恵器・平安土師器・須恵器	（旧称）今古閑・久保遺跡
3	轟遺跡	集落跡	轟今古閑	弥生・古墳・平安	銅鉾4本・鉄斧1・弥生土器・古墳須恵器・平安土師器	新聞４、広報６、９、16他
4	滴水西原遺跡	包蔵地	滴水西原他	縄文・弥生・古墳・平安	縄文土器・石器・弥生土器・支脚形土製品・平安須恵器	（旧称）滴水遺跡 甕棺
5	滴水館跡	城館跡	滴水東屋敷他	中世		居館、土塁
6	滴水館遺跡	包蔵地	滴水東屋敷 西屋敷	縄文～中世		
7	投刀塚古墳	古墳	滴水大塚ノ元	古墳		円墳・内部不明
8	東中原遺跡	包蔵地	平野東原他	縄文・弥生・古墳・平安・中世	縄文土器・石器・弥生土器・古墳土器・平安須恵器・青磁	（旧称）平野遺跡 甕棺
9	荻迫遺跡	集落跡	荻迫前畑他	縄文・弥生・平安・中世	縄文土器・石器・弥生土器・平安土師器・須恵器・すり鉢	縄文後期 弥生後期の集落跡
10	荻迫柿木台場薩軍墓地	墓地	荻迫四ッ塚	明治		１基・封土上に建つ・新設墓標もある
11	鬼のかま古墳	古墳	荻迫萩原	古墳		２基・石材露出・円墳・横穴式石室
12	荻迫狐塚古墳	古墳	荻迫萩原	古墳		円墳・外堤があったが現在はなし
13	滴水東屋敷の板碑	石造物	滴水東屋敷	室町		同一碑に享禄３年（1530） 天文２年（1533）銘あり
14	町裏遺跡	包蔵地	滴水町裏他	縄文・弥生・平安	縄文土器・弥生土器・平安土師器・須恵器	（旧称）植木町三丁目遺跡 甕棺
15	腹佛長遺跡	包蔵地	鐙田腹佛長他	縄文・平安・中世	縄文土器・平安土師器・瓦器・中世火鉢・天目茶碗	
16	城之内古墳	古墳	轟城之内	古墳		詳細不明
17	**野入遺跡**	包蔵地	鐙田野入他	縄文・平安	縄文土器・石器・平安土師器・須恵器	
18	北中尾遺跡	包蔵地	鐙田北中尾 西原他	弥生・平安	弥生土器・平安須恵器	
19	沖遺跡	包蔵地	鐙田沖 請地他	縄文・平安・中世	縄文土器・平安須恵器・土師器・中世土器・青磁・古銭	縄文後期
20	鐙田中尾遺跡	包蔵地	鐙田中尾	縄文・弥生・平安・中世	縄文土器・弥生土器・平安土師器・中世土器	
21	滴水古閑原遺跡	包蔵地	滴水古閑原 中野	弥生・平安	弥生土器・甕棺・平安須恵器	
22	投刀塚堀ノ内遺跡	包蔵地	投刀塚堀ノ内	縄文・平安	縄文土器・石器・平安土師器・須恵器	
23	四ッ塚遺跡	包蔵地	荻迫四ッ塚他	縄文・弥生・平安	縄文石器・弥生土器・平安土師器・須恵器	
24	尖り遺跡	包蔵地	滴水尖り	縄文・弥生・奈良・平安・中世・近世	縄文土器・弥生土器・平安土師器・中世土師器・青磁	弥生中期集落跡甕棺群
25	内山遺跡	包蔵地	滴水内山	縄文・弥生・平安・中世	縄文土器・弥生土器・平安土師器・須恵器・青磁・鉄滓	縄文後期 弥生中期集落跡
26	大道端遺跡	包蔵地	滴水大道端 北原他	縄文・弥生・平安・中世	縄文土器・弥生土器・土師器・須恵器・中世火鉢・青磁	
27	加川原遺跡	包蔵地	滴水加川原 中道他	縄文・弥生・古墳・平安	縄文土器・弥生土器・甕棺・古墳土師器・平安土師器	
28	乗尾遺跡	包蔵地	轟乗尾	弥生	弥生土器・石包丁	

第１表　周辺遺跡一覧表



第 1 図　周辺遺跡分布図（S=1/25,000）

第Ⅲ章　調査の方法と成果

第１節　調査の方法（第２・３図）

野入遺跡の発掘調査は次のように進めた。

１区の表土１層・２層・３層、Ⅱ層は重機を用いて土を除去した。Ⅲ層は人力によって掘り下げを実施し、この層出土の遺物については、出土地点は記録せず、グリッドごとの包含層出土遺物として扱った。Ⅳ層の掘り下げは、人力で行い、この層の上面で遺構検出を実施した。Ⅳ層出土遺物の中で、遺構に伴うものは出土地点を記録し、遺構に伴わないものはグリッド出土遺物とした。遺構については、検出段階、完掘段階を中心に写真撮影を行い、完掘後に図面に記録した。Ⅳ層より下位の層からは、遺構・遺物を確認できなかったので、Ⅳ層下面で掘り下げを終了した。

２区の調査で、重機による剥ぎ取りを行ったのは表土１層・２層である。Ⅲ層とⅣ層の掘り下げは人力で行った。遺構の検出はⅣ層上面で実施した。遺構の記録と遺物の取り上げは１区と同様に行った。２区の掘り下げは１区と同様にⅣ層下面まで行った。

３区は客土層であるＡ層・Ｂ層・Ｃ層・Ｄ層及びⅡ層を重機で剥ぎ取った。その後の下位層の掘り下げは１区と同様に行った。遺構の検出はⅣ層上面で実施し、遺構の記録と遺物の取り上げは１区と同様に行った。１区・２区と異なる点は、確認のため深掘りしたトレンチでⅤ層から遺物が出土したので、３区の掘り下げはⅤ層まで行った。

第２節　層序

野入遺跡は植木町内にあり、同町内に所在する他の遺跡との比較を容易にするため、今回の発掘調査における層序は植木町内の基本層序を用いることにした（植木町教育委員会　2004）。

第３図は各調査区の中で、層序の残りが良い箇所を選択して、その一部の実測図を掲載したものである。

１　１区の層序について（第３図）

１区の層序の実測図は、調査区北壁のほぼ中央部のものであり、深掘りした箇所が存在する。

表土層は１層・２層・３層に分けることができた。表土１層の厚さは約４～12㎝である。表土２層の厚さは約10～14㎝である。表土３層の厚さは約10～20㎝である。

Ⅱ層は黒褐色の旧耕作土であり、層の厚さは約４～12㎝で、粘性は弱く、ややしまりがある。

Ⅲ層は黒褐色土であり、しまりが弱く、粘性があまりない。層の厚さは約６～14㎝で、この層には縄文後・晩期の土器、中世の土師器が包含される。

Ⅳ層は暗褐色土で、しまりが弱く、粘性が僅かにある。層の厚さは約８～22㎝で、他の層と比べると、層の凹凸が著しい。この層には縄文時代早期の遺物、縄文後・晩期の土器、中世の土師器などが含まれている。Ⅳ層から掘り込まれた遺構の覆土がａ層～ｄ層である。

Ⅴ層は暗褐色土で、しまりが弱く、やや粘性がある。層の厚さは約12～30㎝である。

Ⅵ層は黒褐色土で、ややしまりがあり、やや粘性がある。層の厚さは約16～28㎝である。Ⅵ層より下位の層は深掘りした箇所で確認した層である。

Ⅶ層は黒褐色土を呈しており、Ⅵ層の色より少し暗い。この層はややしまりがあり、やや粘性がある。層の厚さは約20～32㎝である。

Ⅷ層は黒褐色土で、ややしまりがあり、粘性が強い。層の厚さは約１～10㎝である。

Ⅸ層は黒褐色土で、ややしまりがあり、強い粘性がある。層の厚さは約20㎝まで確認した。

２　２区の層序について（第３図）

２区の層序の実測図は、調査区西端の北壁で確認したものである。

表土層は1層・2層に分けることができ、表土1層の厚さは約18～42㎝である。表土2層は部分的に確認できた層で、厚さは約1～18㎝である。

Ⅲ層は暗褐色土であり、しまりが弱く、粘性が弱い。層の厚さは約8～32㎝である。この層から土師器、須恵器などが出土している。

Ⅳ層は褐色土で、しまりが弱く、粘性は弱い。他の層と比較すると、明確な層の凹凸が認められる。層の厚さは約8～38㎝である。この層からは縄文時代後・晩期の土器などが出土している。

Ⅴ層は暗褐色土で、しまりが強い。粘性は弱く、サラサラしている。層の厚さは約25～30㎝である。

Ⅵ層は部分的に存在する層である。この層は暗褐色土で、しまりが強く、粘性は弱い。層の厚さは最大で約25㎝を測る。

3　3区の層序について（第3図）

3区の層序の実測図は、調査区東端の南壁で確認したものである。3区は調査区の中で、最も西側に位置しており、最も標高が低い。2区と3区との境には明確な高低差があり段になっている。そのため、後世に土地を均すために盛土が施されている。

A層～D層は客土層である。A層は耕作土であり、層の厚さは約22～28㎝である。B層は褐色土であり、土の粒子はきめ細かく、ややしまっている。層の厚さは約6～18㎝である。C層は褐色で、ややしまりのある土である。土の粒子はきめ細かく、層の厚さは約4～22㎝である。D層は褐色土で、ややしまっているが、層の上下でしまりに違いが認められる。層全体に黄橙色粘土粒が混じる。層の厚さは約4～30㎝である。

Ⅱ層は褐色の旧耕作土であり、粒子が小さく、ややしまる。層の厚さは約26～30㎝である。

Ⅲ層は暗褐色土である。Ⅱ層と比較すると、しまりがない。層の厚さは約14～24㎝である。この層から縄文時代後・晩期の土器、中世の土師器、須恵器、青磁などが出土している。

Ⅳ層は褐色土であり、Ⅲ層と比べると、さらにやわらかい。層の厚さは約8～18㎝である。この層から縄文時代早期の土器、縄文時代後・晩期の土器などが出土している。

Ⅴ層は褐色土である。Ⅳ層と比較するとしまりがある。層の厚さは約14～30㎝である。この層から縄文時代後・晩期の土器などが出土している。

（参考文献）

植木町教育委員会「塔ノ本遺跡他」『植木町文化財調査報告書第18集』 2004年

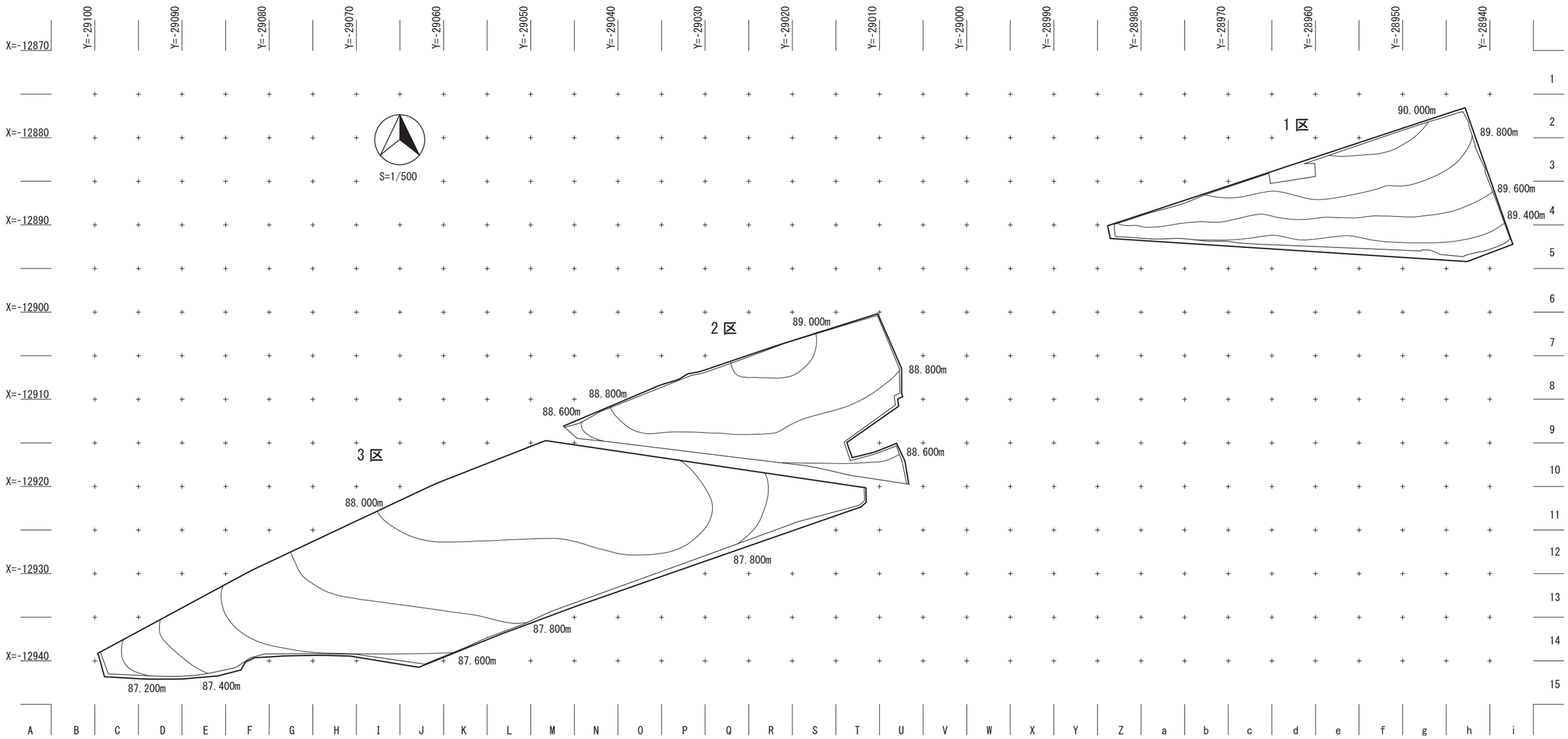
第3節　遺構

1　1区の検出遺構の分布状況について（第4図）

SKについては、検出時点で、001～008の遺構番号をつけた。しかし、調査を進める中で、005は遺構ではないと判断した。遺構番号の訂正をすると、調査を継続する上で、混乱を生じさせるので、005は欠番とすることにした。確認した7基のSKは調査区東端部以外の箇所のほぼ全面に広がった状態で分布している。

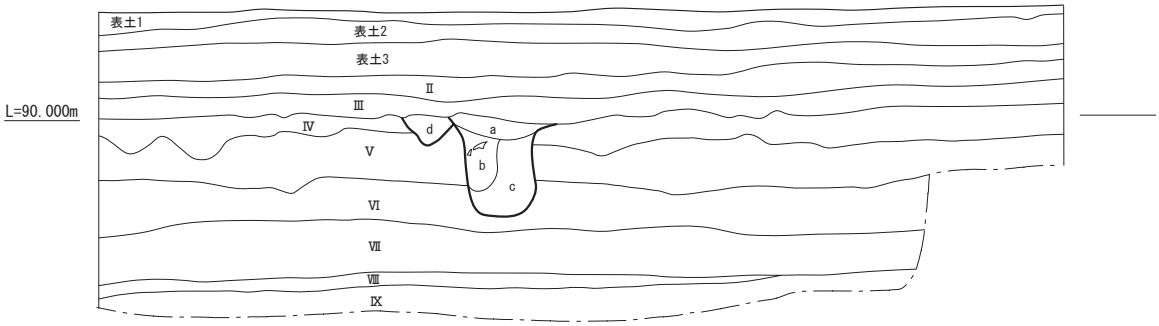
調査区の東端部にはSX-001が南北方向の帯状に伸びている。

SX-001に隣接した西側にはSF-001がほぼ南北方向に伸びており、帯状を呈している。



第 2 図　調査区地形測量図及びグリッド図

1 区



Ⅱ　10YR2/3　黒褐
　　やや締まる　粘性弱い

Ⅲ　10YR2/2　黒褐
　　締まり弱い　粘性弱い

Ⅳ　10YR4/4　褐
　　しまり弱い　粘性ややあり

Ⅴ　10YR3/4　暗褐
　　しまり弱い　粘性ややあり

Ⅵ　10YR2/3　黒褐
　　やや締まる　粘性ややあり

Ⅶ　10YR2/3　黒褐
　　やや締まる　Ⅵ層より粘性ややあり

Ⅷ　10YR2/3　黒褐
　　やや締まる　粘性強い

Ⅸ　10YR4/6　褐
　　やや締まる　粘性強い

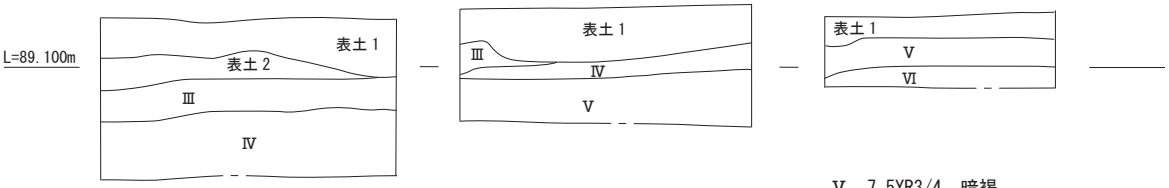
a　10YR2/3　黒褐
　　締まり弱い　粘性弱い

b　10YR3/4　暗褐
　　締まり弱い　粘性弱い
　　縄文土器を含む

c　10YR3/3　暗褐
　　締まり弱い　粘性弱い

d　10YR2/2　黒褐
　　締まり弱い　粘性わずかにあり
　　黄色の土が混じる

2 区



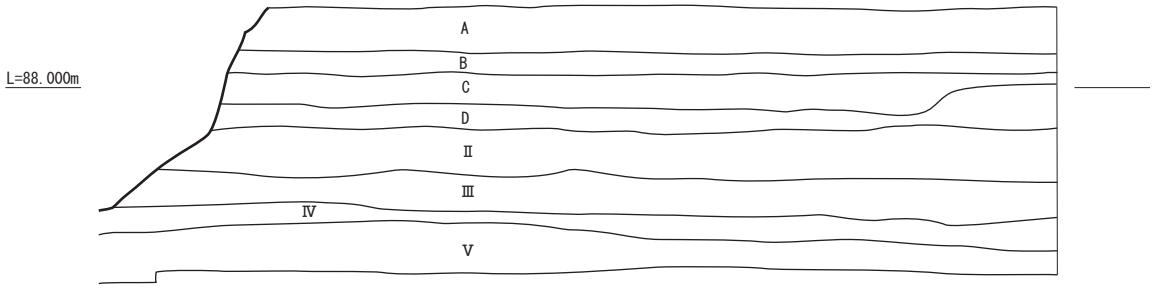
Ⅲ　10YR3/3　暗褐
　　しまり弱い　粘性弱い
　　植木基本土層 3 に対応

Ⅳ　10YR4/4　褐
　　しまり弱い　粘性弱い
　　植木基本土層 4 に対応

Ⅴ　7.5YR3/4　暗褐
　　しまり強い　粘性弱い　サラサラ
　　植木基本土層 5 に対応

Ⅵ　7.5YR3/3　暗褐
　　しまり強い　粘性弱い
　　植木基本土層 6 に対応

3 区



A　耕作土　水田の耕作土と床土に分かれる

B　7.5YR4/4　褐
　　キメ細かくやや締まる

C　7.5YR4/4　褐

D　7.5YR4/3　褐
　　層全体に黄橙色粘土粒を含む
　　層中で上下でやや締まりに違いがある

Ⅱ　10YR4/4　褐
　　キメ細かな土で他の土等の混入は見られない
　　やや締まる

Ⅲ　10YR3/3　暗褐
　　Ⅳ層に近い土がブロック状にわずかに含まれる
　　Ⅱ層に比べやや締まりがない

Ⅳ　7.5YR4/4　褐
　　Ⅲ層より更にやわらかく締まりはない

Ⅴ　10YR4/4　褐
　　Ⅳ層に比べ締まる

0　1m
S=1/40

第 3 図　基本土層図

SB-001 は調査区のほぼ中央にあり、建物跡の主軸方向はほぼ南北であり、建物跡の東側に約 5m 離れた箇所にある SF-001 が伸びる方向とほぼ一致している。

SB-001 の約 5m 西側には SI-001 ～ 006 を確認した。竪穴建物跡はほぼ同じ箇所に 6 回の建て替えを行っている。

2　2 区の検出遺構の分布状況について（第 11 図）

2 区で検出した遺構は、SI-001 ～ 003 である。これらの遺構は調査区の東側に寄った箇所で検出した。これらの建物跡の主軸方向はほぼ南北であり、1 区で検出した建物跡の主軸方向と一致している。

3　3 区の検出遺構の分布状況について（第 11 図）

3 区で検出した遺構は、調査区のほぼ全面に広がっている。SK-001 ～ 003 は調査区のほぼ中央部から東側にかけて分布している。SI-001、SI-002 は調査区の南側部分で確認した。SB-001、SB-002 は調査区の北東部で検出した。SI と SB の主軸方向は二種類ある。一つは南北方向の主軸であり、もう一つは北東～南西方向の主軸である。SD-001 は調査区のほぼ中央部で、南北方向に帯状に伸びている。SD-001 の東側隣接地点で調査区の南端部に SX-001 がある。調査区の西側で、南端部では円形周溝状遺構を検出した。

4　1 区の遺構について

1 区で検出した遺構の詳細は第 2 表のとおりである。

ここでは検出した遺構の概要について記述する。

SK-001（第 9 図）

SK-001 はピットから切られている。残存しているのは僅かである。

SK-002（第 9 図）

SK-002 の平面形は隅丸方形であり、断面形は深い皿状を呈している。4 はこの遺構に伴う状態で出土した遺物で、土師器の甕口縁部片である。口縁部は頸部でくの字形に大きく屈曲しながら伸び、口縁部端部で丸くなっている（第 9 図、第 3 表）。

SK-003（第 9 図）

SK-003 は南側半分を検出したが、北側半分は調査区外に存在している。検出した部分から平面形は隅丸方形と推定でき、断面形は深い皿状である。

SK-004（第 9 図）

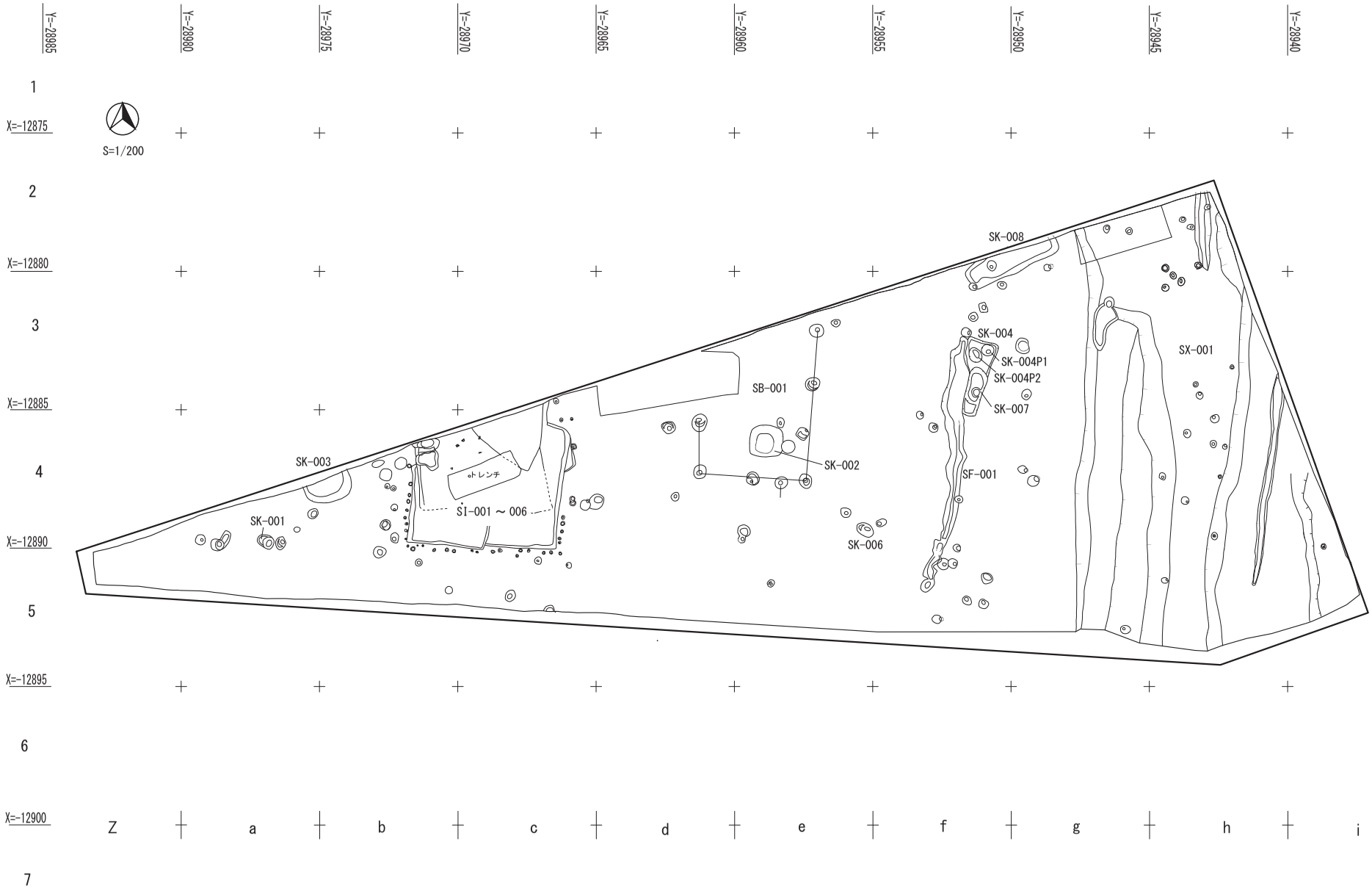
SK-004 は 3 基の遺構が重複している。切り合い関係を整理すると、SK-004 → SF-001 → SK-007 となる。SK-004 は 2 基の遺構から切られているので、本来の形態が不明である。残っている平面形は 2 辺がほぼ直交しており、遺構内部に平面形がほぼ円形で、断面形が筒状を呈する掘りこみが 2 基ある。

SK-006（第 9 図）

SK-006 の平面形は楕円形をしている。断面形を見ると、二段掘りになっており、深掘りしている部分は深い皿状を呈している。

SK-007（第 9 図）

SK-007 の平面形は細長い楕円形をしている。断面形は南側部分が二段掘りになっており、深い箇所は略台形を呈している。


Y=-28985
Y=-28980
Y=-28975
Y=-28970
Y=-28965
Y=-28960
Y=-28955
Y=-28950
Y=-28945
Y=-28940
1
2
3
4
5
6
7
X=-12875
X=-12880
X=-12885
X=-12890
X=-12895
X=-12900
S=1/200
Z
a
b
c
d
e
f
g
h
i
SK-008
SK-004
SK-004P1
SK-004P2
SK-007
SX-001
SB-001
SK-002
SF-001
SK-006
SK-003
SK-001
トレンチ
SI-001 ～ 006

第 4 図　1区 遺構配置図

SK-008（第 9 図）

SK-008 の北側一部は調査区外にある。検出した範囲から、平面形は細長い長方形を呈している。断面形は略台形になっている。

SX-001（第 10 図）

SX-001 は近世以降に南北方向に伸びる小規模な谷地形を活用し､窪地を畑等として利用したいわゆる｢ほりばたけ｣と呼ばれているものではなかろうか。北側から南側に向けて低くなった傾斜を確認している。旧植木町が主体となった国道 3 号植木バイパス建設工事に伴う発掘調査では、この「ほりばたけ」は西南戦争時に塹壕として再利用していたことが確認されている。

SB-001（第 8 図）

SB-001 の主軸は南北方向の掘立柱建物跡である。梁間は 2 間であるが、桁行は 3 間分を確認したが、その先が調査区外に伸びるかどうかは不明である。確認した部分は 2 間× 3 間である。南東部の隅柱と西側梁部の北端部の掘り方には柱痕跡がある。

SF-001（第 10 図）

SF-001 は硬化した土が帯状の平面形を呈する道路跡である。硬化した部分の断面形は凸レンズ状をしている。土層断面図を見ると、この硬化した層はⅣ層上面にあり、Ⅲ層が覆土となっている。北側部分の硬化面幅は残りが広く、南側になると、硬化面の幅が狭くなっている。

SI-001（第 5 図）

1 区の竪穴建物跡は 6 基確認している。その中で、切り合い関係を確認できたものは 5 基である。これらの切り合い関係は、SI-005 → SI-004 → SI-003 → SI-002 → SI-001 である。

SI-001 で確認できたのは、南隅とその周辺箇所であり、大半は調査区外に存在している。硬化面の一部を確認した。1 は SI-001 から出土した手捏ね土器片である。全体の形状は逆ハの字状を呈しており、内外器面に指頭痕が残る。口縁部内器面には赤色顔料が部分的に残っている（第 5 図、第 3 表）。

SI-002（第 5・6 図）

SI-002 で確認できたのは南側の約半分である。北側の約半分は調査区外に存在する。確認できた北西隅に竈が作られている。検出したのは竈の下半部の一部である。床面には硬化面が残っている。2はSI-002の覆土、竈内から出土した土師器の甕口縁部から胴部にかけての破片である。口縁部は、くの字形に短く外反しながら立ち上がり、端部は丸くなる。3は土師器甕の口縁部から胴部上部にかけての破片である。頸部でくの字形に屈曲している（第6図、第3表）。

SI-003（第 5 図）

SI-003 で確認できたのは、南西隅と南東隅で、そこから各々北側に伸びる辺の周辺部である。床の硬化面の残存状況はあまりよくない。

SI-004（第 5 図）

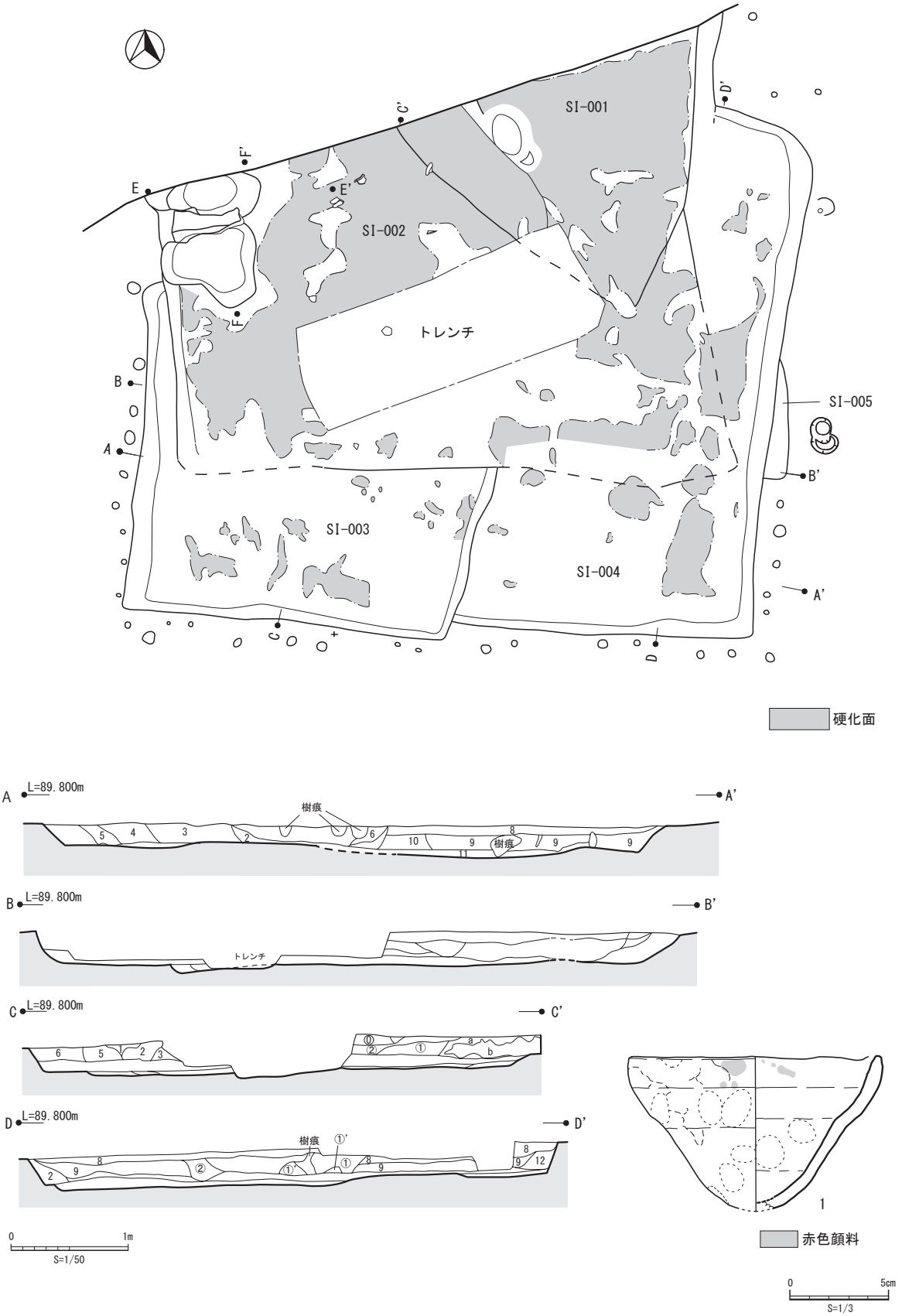
SI-004 の確認部は、南東隅、北東隅とそこから各々西側に伸びる辺の周辺部である。検出した東側箇所に床の硬化面が残っている。

SI-005（第 5 図）

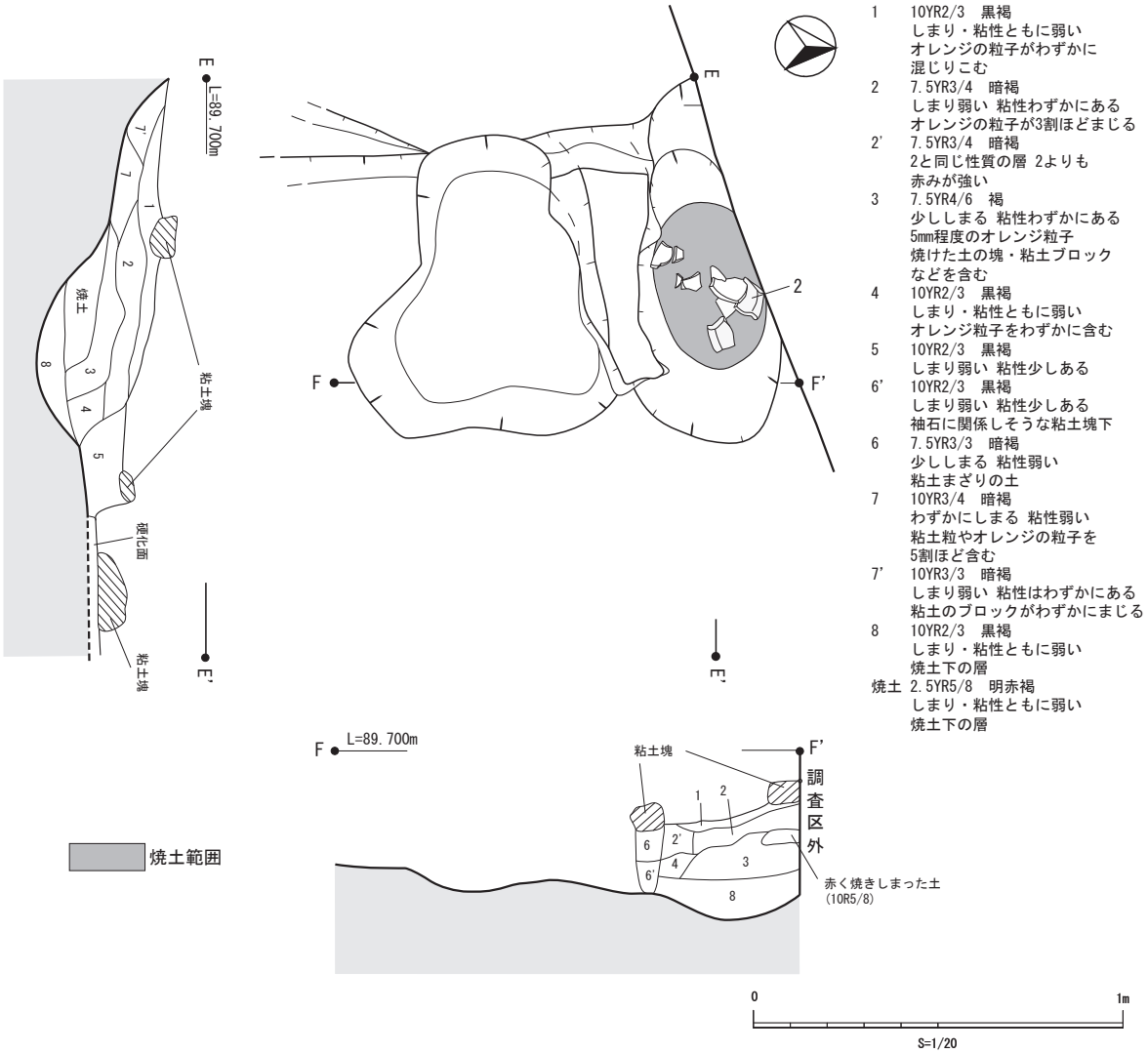
SI-005 は南東隅の一部分だけが確認できた。遺構の殆どが切られており、検出できない。

SI-006（第 7 図）

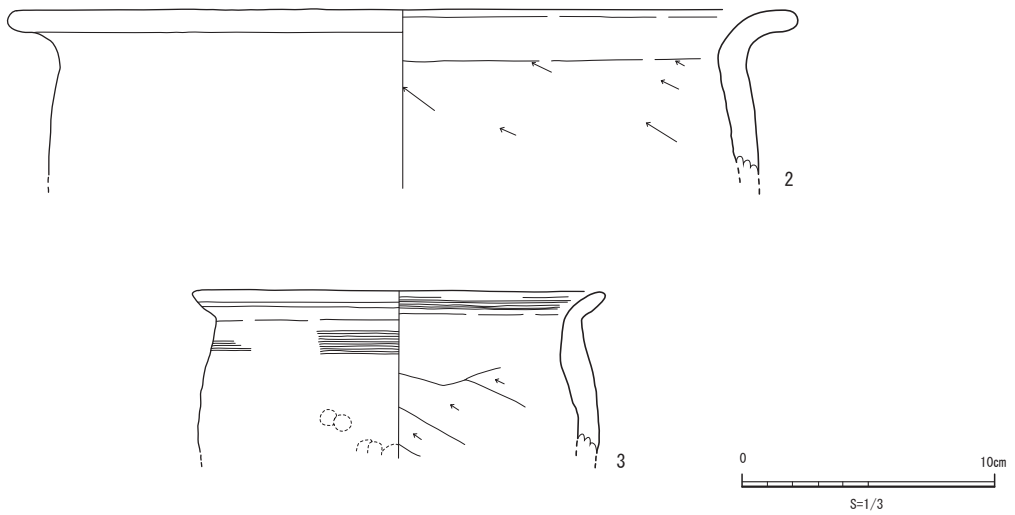
SI-006 は SI-001 ～ SI-004 の下面で確認したものである。建物跡内にピットが複数掘り込まれている。部分的に壊されているが、4 本柱と推定できる。建物跡の中央部に寄った箇所に床の硬化面が残っている。



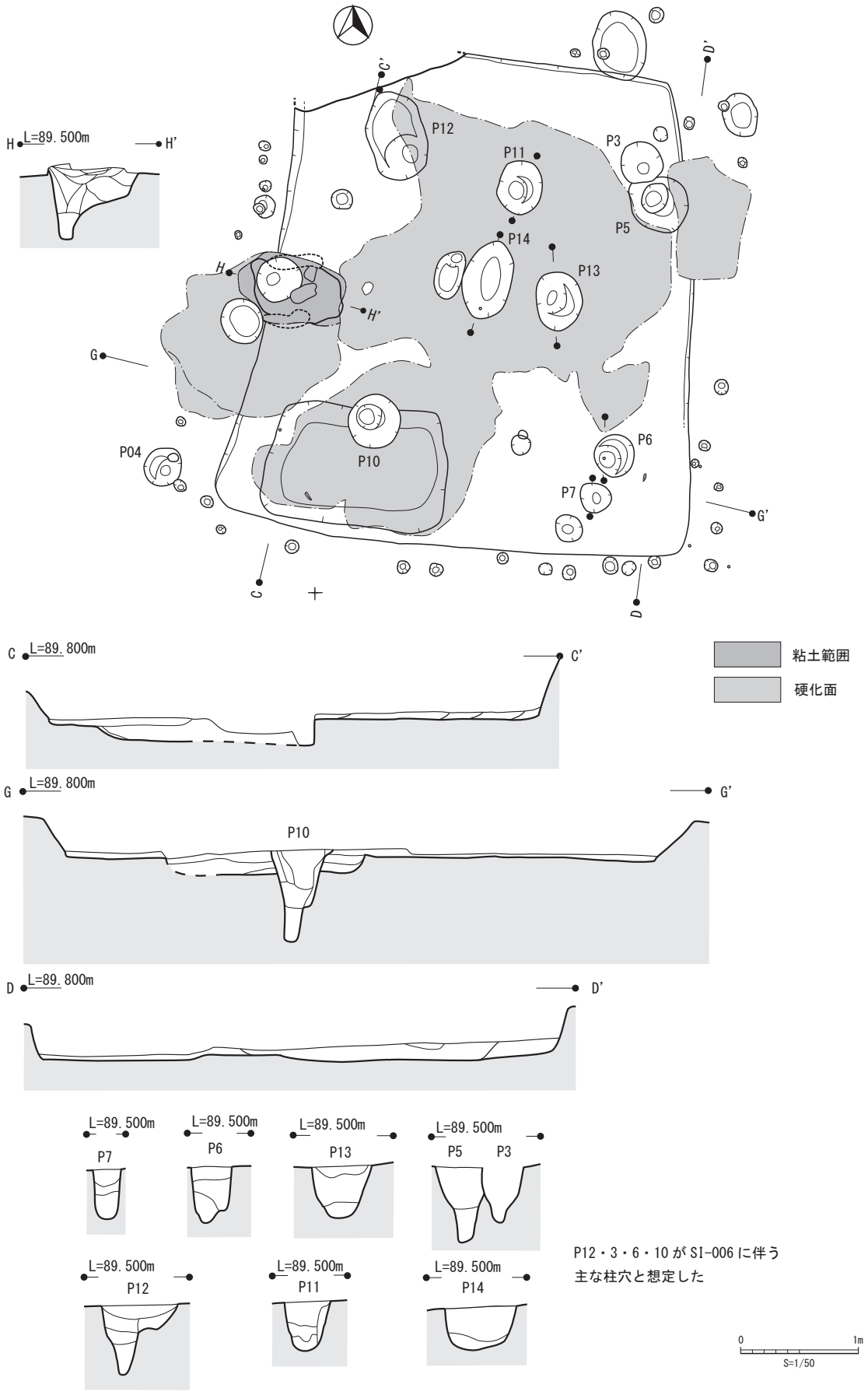
第 5 図　1 区 SI-001 ～ 005 実測図及び出土遺物実測図



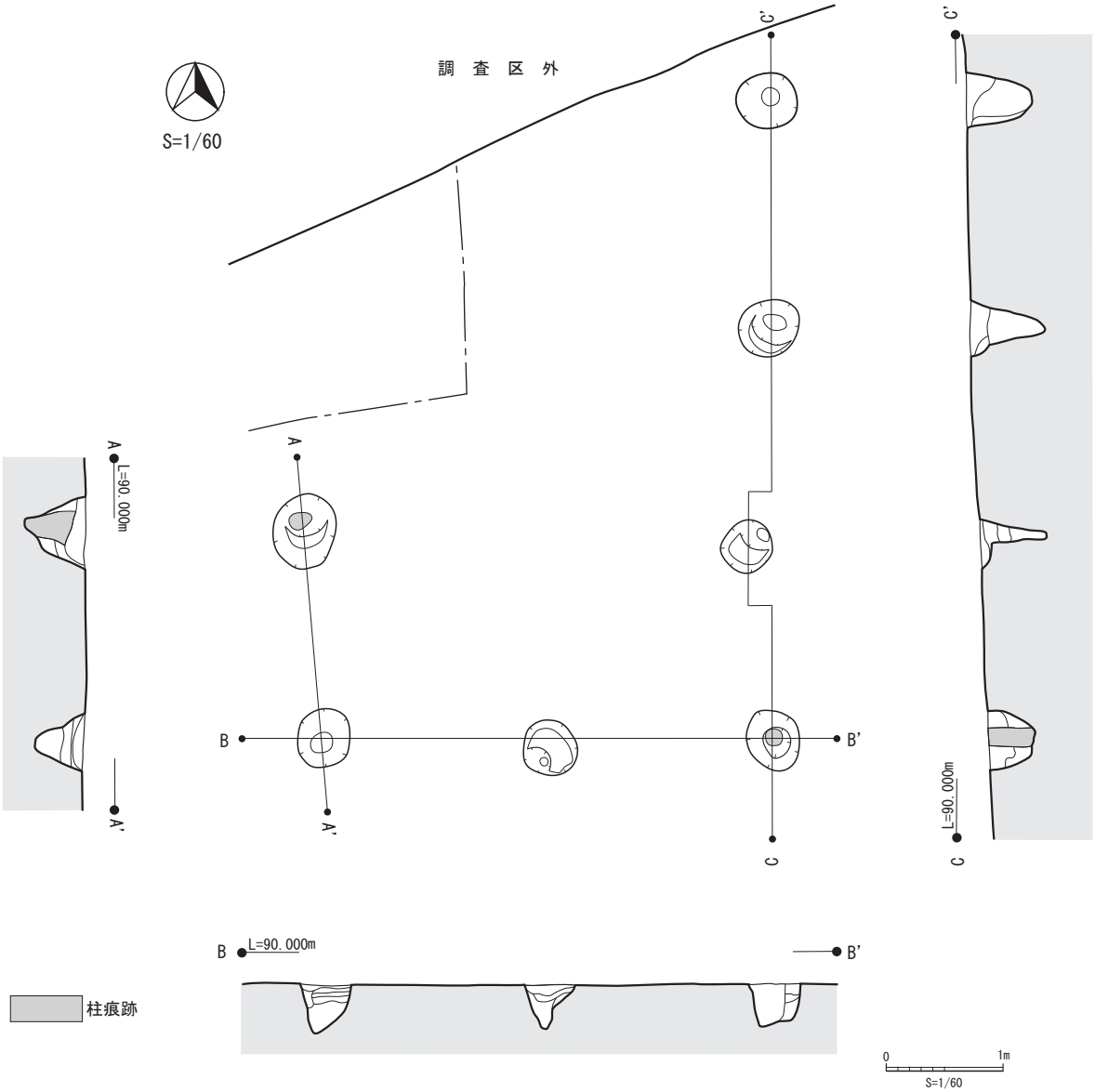
1　10YR2/3　黒褐
しまり・粘性ともに弱い
オレンジの粒子がわずかに
混じりこむ
2　7.5YR3/4　暗褐
しまり弱い 粘性わずかにある
オレンジの粒子が3割ほどまじる
2'　7.5YR3/4　暗褐
2と同じ性質の層 2よりも
赤みが強い
3　7.5YR4/6　褐
少ししまる 粘性わずかにある
5mm程度のオレンジ粒子
焼けた土の塊・粘土ブロック
などを含む
4　10YR2/3　黒褐
しまり・粘性ともに弱い
オレンジ粒子をわずかに含む
5　10YR2/3　黒褐
しまり弱い 粘性少しある
6'　10YR2/3　黒褐
しまり弱い 粘性少しある
袖石に関係しそうな粘土塊下
6　7.5YR3/3　暗褐
少ししまる 粘性弱い
粘土まざりの土
7　10YR3/4　暗褐
わずかにしまる 粘性弱い
粘土粒やオレンジの粒子を
5割ほど含む
7'　10YR3/3　暗褐
しまり弱い 粘性はわずかにある
粘土のブロックがわずかにまじる
8　10YR2/3　黒褐
しまり・粘性ともに弱い
焼土下の層
焼土　2.5YR5/8　明赤褐
しまり・粘性ともに弱い
焼土下の層



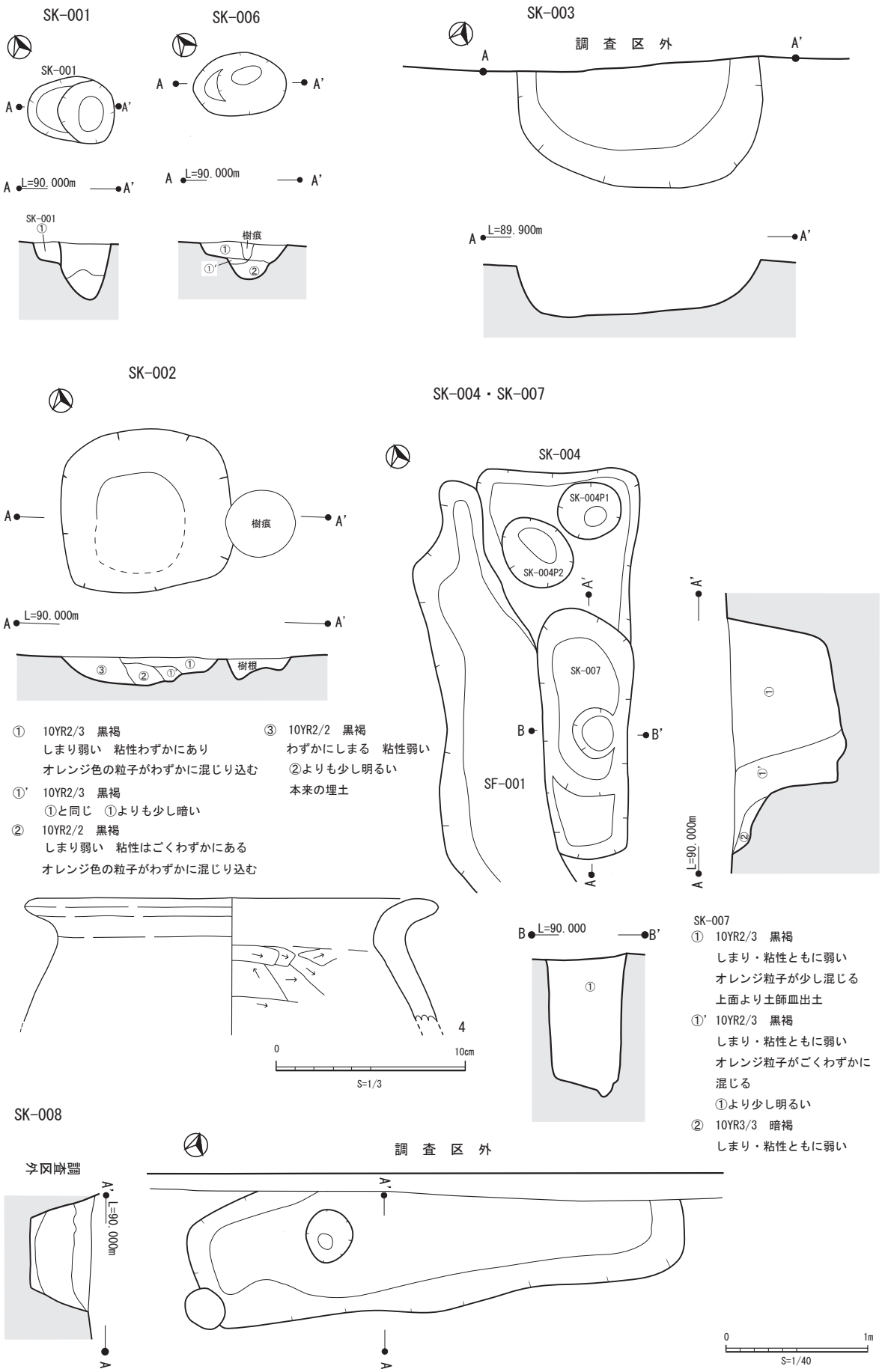
第 6 図　1 区　SI-002 竈実測図及び出土遺物実測図



第 7 図　1 区　SI-006 実測図

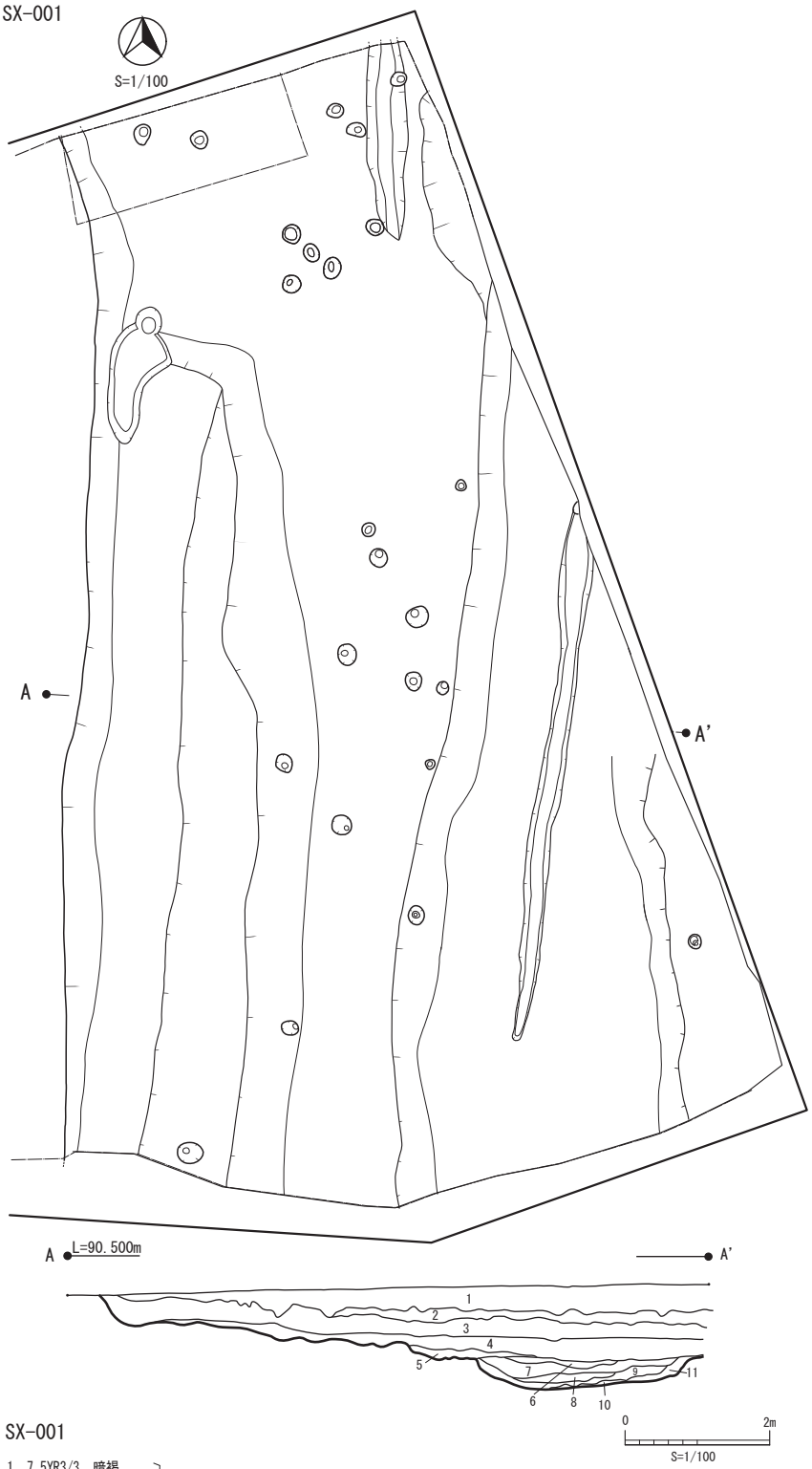


第 8 図　1 区　SB-001 実測図

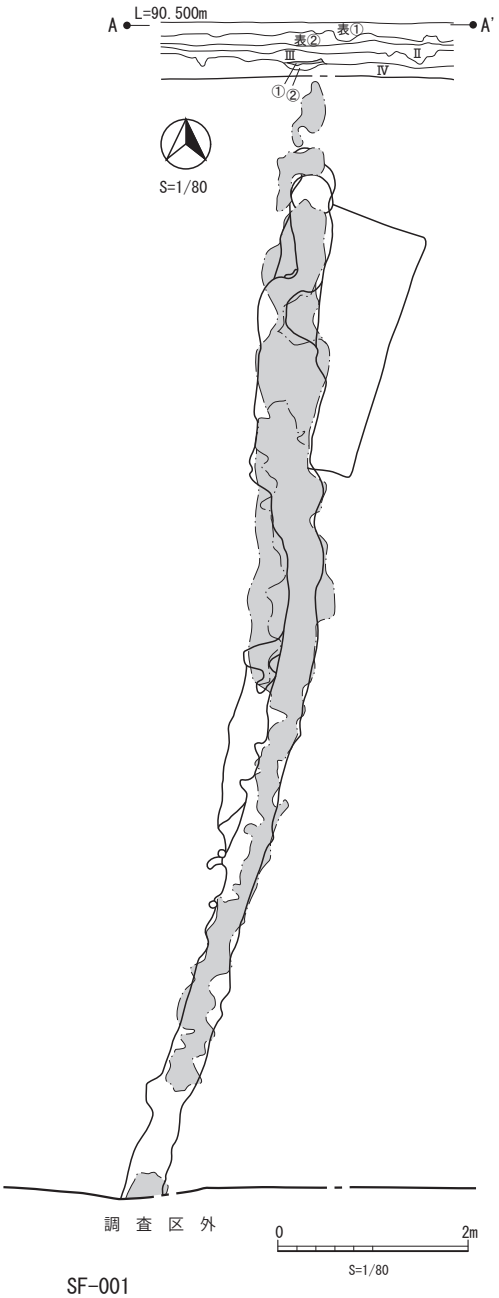


第 9 図 1 区 SK-001 ～ 004・006 ～ 008 実測図及び出土遺物実測図

SX-001



SF-001



SX-001

1	7.5YR3/3 暗褐	現地表面を形成する土（客土）明黄褐色粘土を粒状に全体にまんべんなく含む
2	7.5YR4/3 褐	2・3層はよく締まる 近世陶磁器片、西南の役鉄砲玉を含む
3	7.5YR4/2 灰褐	
4	5YR3/2 暗赤褐	キメ細かくよく締まる 褐色粘土を粒状に全体に多く含む
5	7.5YR3/2 黒褐	キメ細かくしまりのない土 明黄褐色土を粒状にわずかに含む
6	5YR2/2 黒褐	キメ細かくよく締まる土 明黄褐色土をしみ状に含む 樹根痕跡か
7	5YR3/2 暗赤褐	キメ細かい土を主体とするが小石を全体に少量含む しまりは少ない
8	10YR3/2 黒褐	ニガ土に似たブロック状の土を含む 間に8層の土が入る
9	10YR3/2 黒褐	キメ細かく、しまりのある土 ほとんど外の土の混入は認められない
10	5YR2/2 黒褐	明黄褐色粘土をブロック状に含む
11	5YR3/1 黒褐	キメ細かく、明黄褐色粘土粒を多く含む

SF-001

SF-001

耕① 耕作土① 10YR2/3 黒褐
しまり強い粘性弱い
床土オレンジ粒が多く混じる

耕② 耕作土② 10YR2/2 黒褐
しまりやや強い粘性弱い
床土オレンジ粒が混じる

Ⅱ 植木基本土層Ⅱ 10YR2/2 黒褐
しまり弱い 粘性弱い

Ⅲ 植木基本土層Ⅲ 10YR2/2～2/3 黒褐
しまり弱い 粘性弱い

Ⅳ 植木基本土層Ⅳ 10YR2/3 黒褐
しまり弱い 粘性弱い

① SF-001 硬化面 10YR3/2 黒褐
しまりきわめて強い 粘性弱い

② SF-001 掘り方 10YR3/3 暗褐
しまり強い 粘性弱い

第 10 図 1区 SX-001 実測図及び SF-001 実測図

5　2区の遺構について

2区で検出した遺構の詳細は第2表のとおりである。

ここでは遺構の概要について記述する。

SI-001（第12図）

SI-001で確認できたのは、北側端部周辺の一部分である。北壁のほぼ中央部には竈を作っており、部分的に焼土が残っていた。床面の中央寄りの箇所で、硬化面を確認した。5はこの遺構の覆土から出土した土師器の坏身片である。体部は底部から外に開きながら直線的に立ち上がっている。内外器面に赤色顔料が塗布されている（第12図、第3表）。

SI-002（第13・14図）

SI-002はほぼ完全な状態で確認できた竪穴建物跡である。建物跡の平面形は方形を呈している。その北側の一辺のほぼ中央部で竈跡を確認した。その周辺には粘土が集中している。建物跡のほぼ中央部には平面形が長方形をした浅い掘込みがある。その上部には範囲を拡大した状態で硬化面を検出した。その検出過程で確認した柱穴から、主要な柱は4本である可能性が高い。

SI-003（第14図）

SI-003で確認できたのは竪穴建物の竈跡の一部分である。竈内には焼土を確認している。殆どは調査区外に存在している。

6　3区の遺構について

3区で検出した遺構の詳細は第2表のとおりである。

ここでは遺構の概要について記述する。

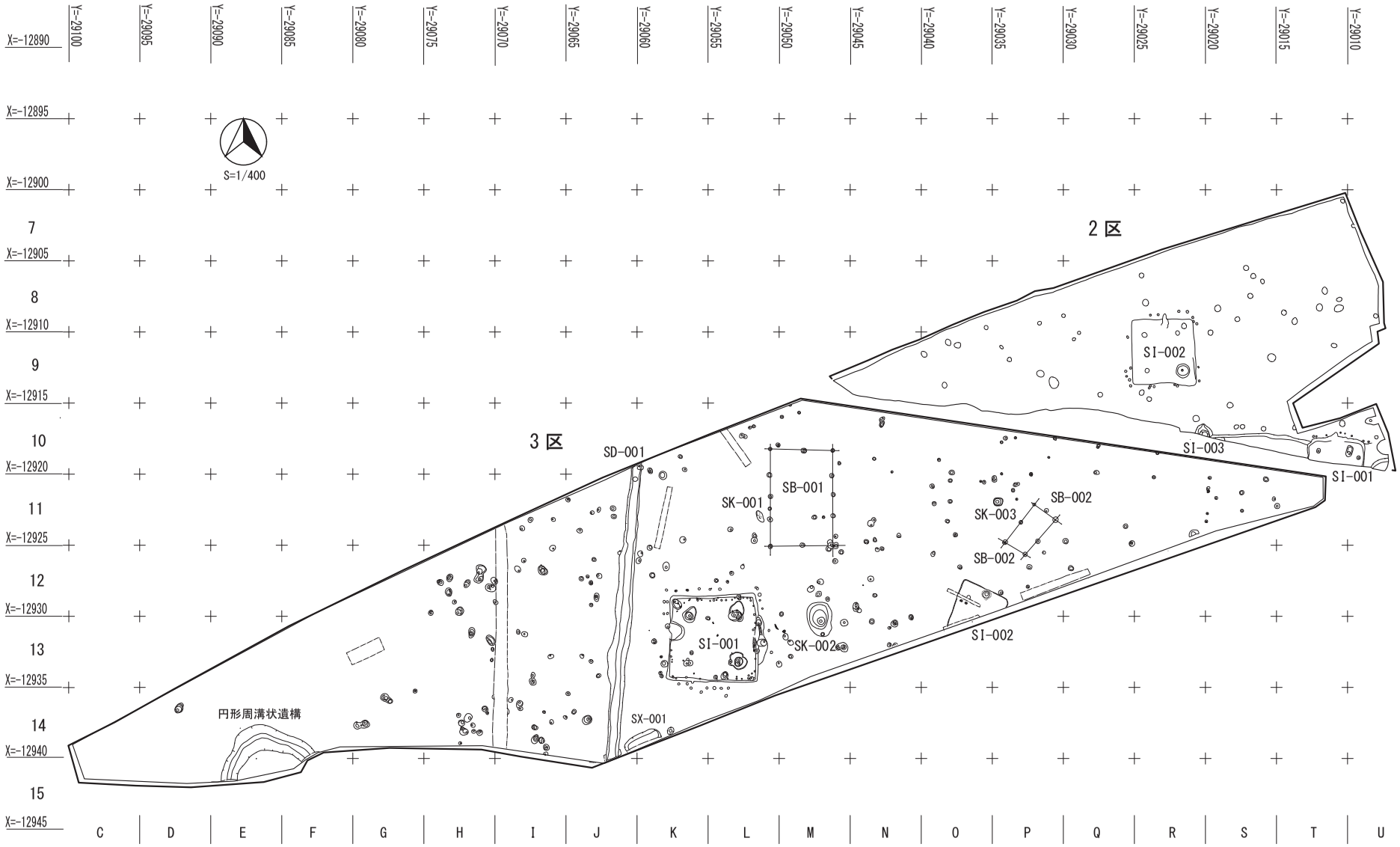
SI-001（第15・16・17図）

SI-001は平面形が方形をした竪穴建物跡である。西側の一辺に竈跡を確認した。硬化面が顕著であり、残存状態が良い。主柱穴は4箇所であり、南西隅の柱穴が浅いが、その他の3箇所の柱穴は深くてしっかりしている。この竪穴建物跡の北西隅に貯蔵穴と考えられる掘り込みがある。この遺構は土坑状のものから切られている。

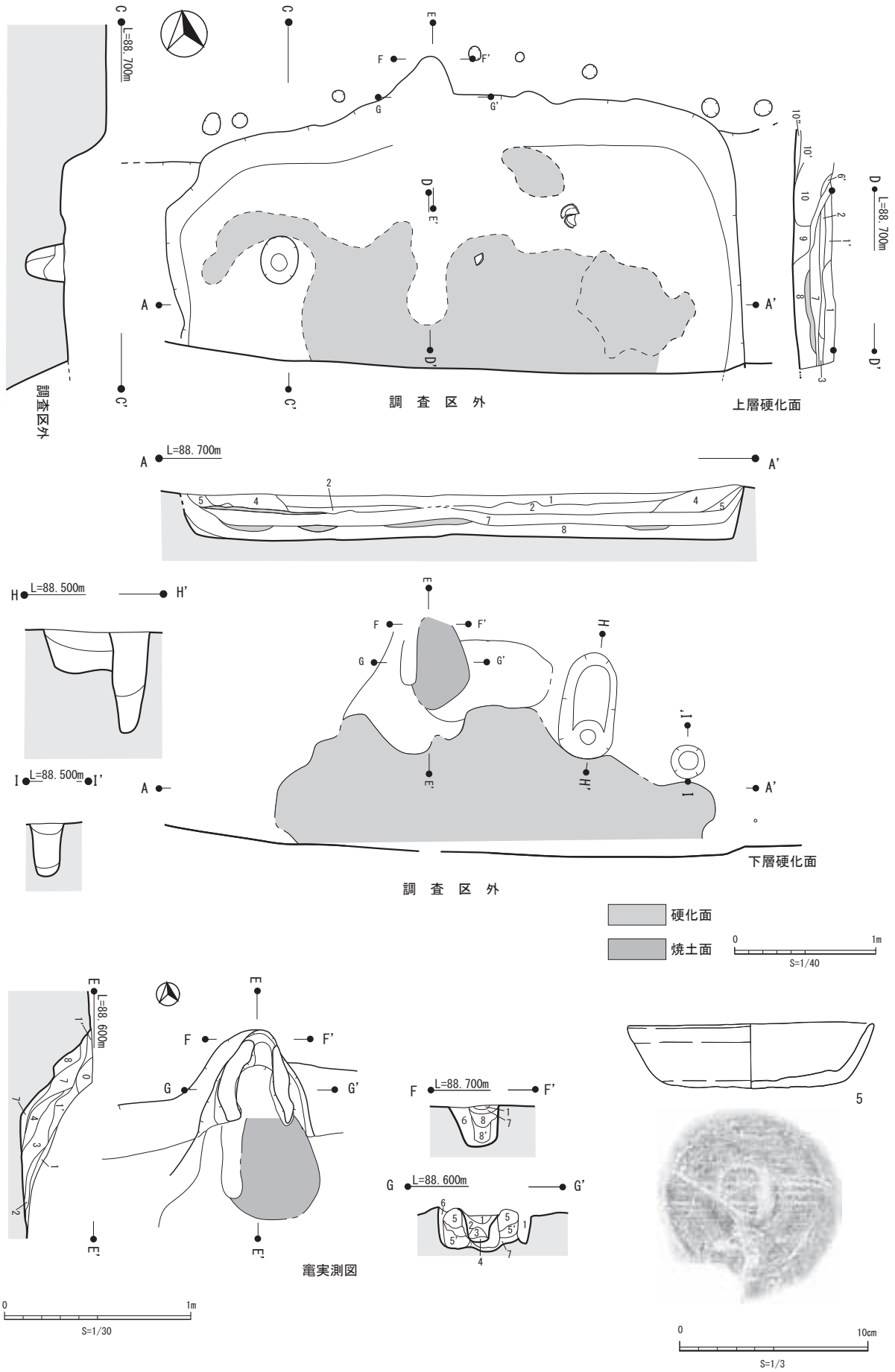
この遺構に伴う状態で出土したのは6点である。6は床面直上出土破片が接合した土師器の甕の口縁部片である。頸部の屈曲は明瞭ではなく、緩やかに外側に開いている。7は建物内出土破片と包含層出土破片が接合した須恵器坏蓋である。天井部には扁平な摘みが付き、口縁部は短く、端部は細くなりながら丸くなる。8は紡錘車である。中央部に穴を穿ってあり、その穴はやや斜めになっている。表裏面や側面は滑らかである。9は床硬化面下から出土した鉄斧で、刃部の一部が欠損している。装着部は折り曲げており、平面形は一長辺が開いた長方形を呈している。10は北西隅の貯蔵穴と思われる遺構内から出土した土師器高坏の坏部である。口縁部は緩やかに外に開きながら立ち上がる。内外器面に赤色顔料が部分的に確認できる。11は竈内から出土した凝灰岩製の支脚である。ほぼ全面に鉄製工具による加工が施されており、工具の端部が稜線状に表面に残っている。上部に向かって細くなっており、上端部付近はやや傾いている（第15・16・17図、第3表）。

SI-002（第18図）

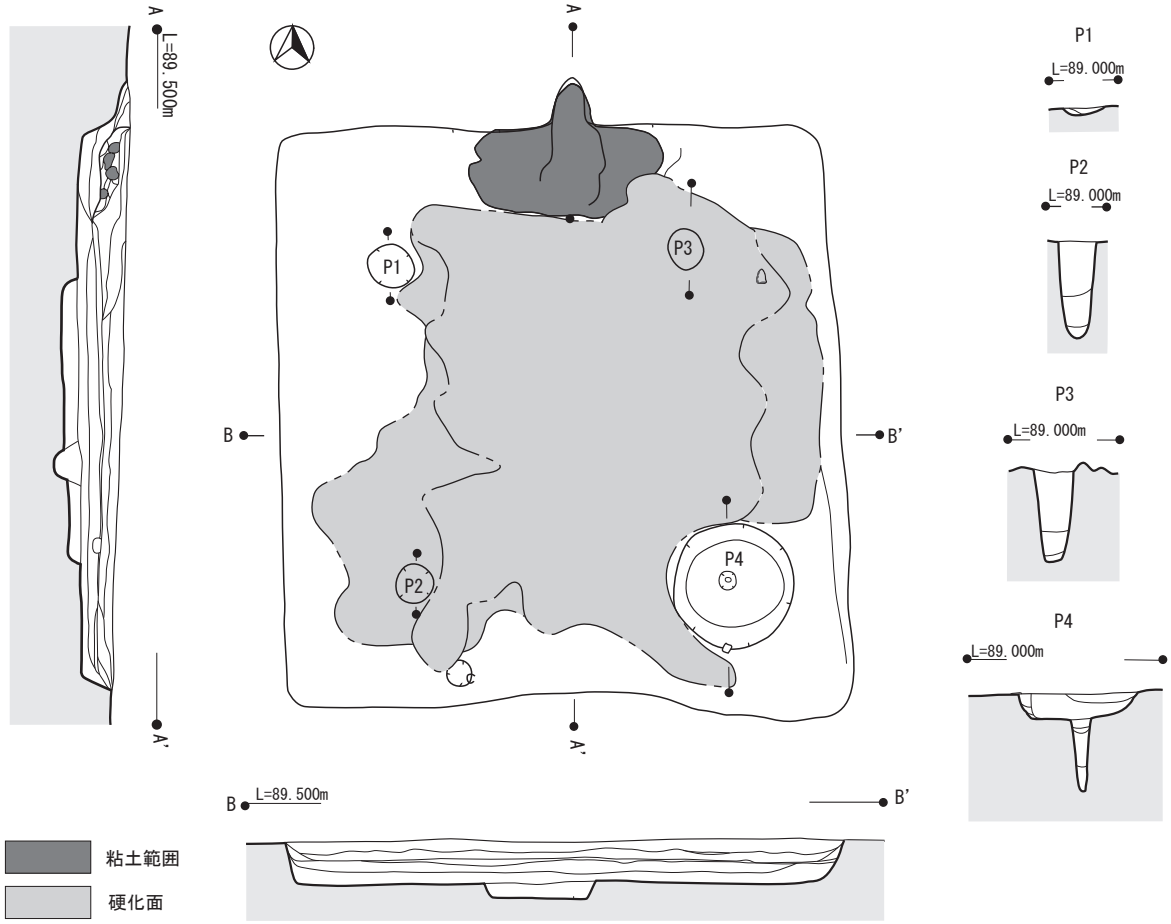
SI002は北東部と北西部の二辺とその周辺部を確認しており、その他の部分は調査区外に伸びている。北東部の辺付近にあるピットの周りに焼土の塊を確認した。

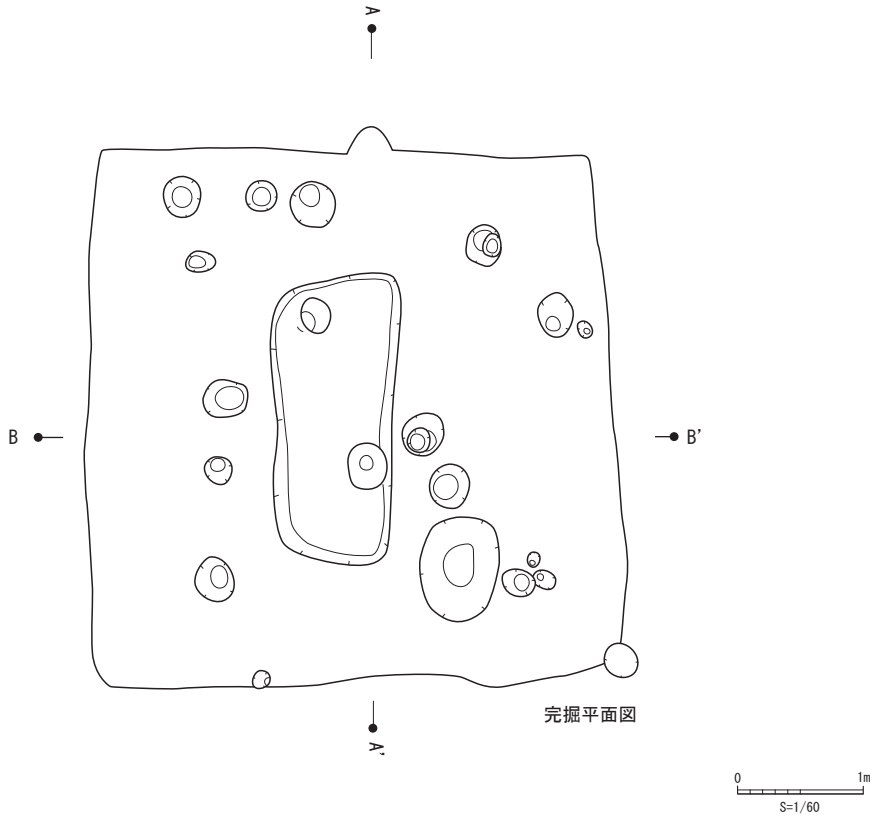


第 11 図　2 区・3 区　遺構配置図



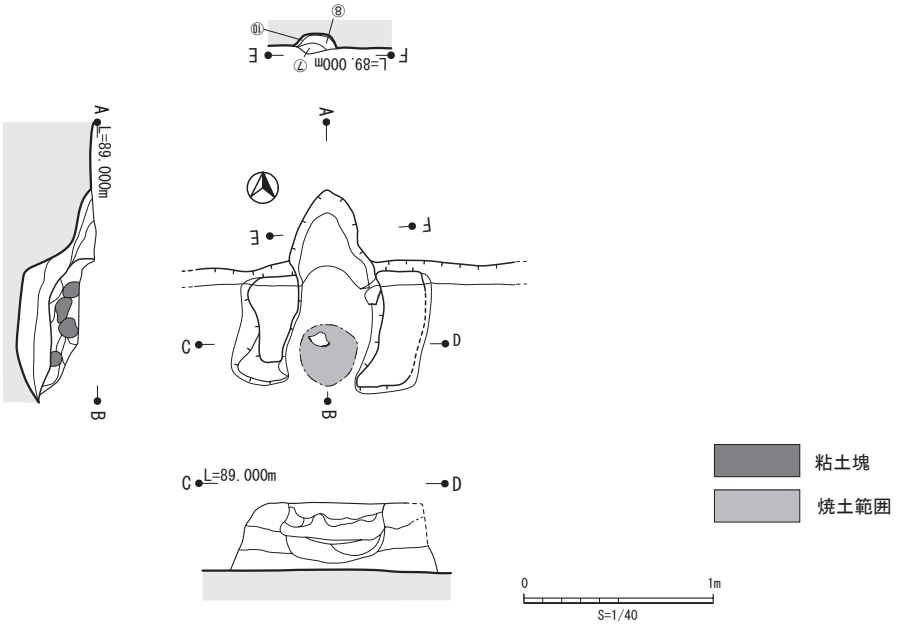
第 12 図 2 区　SI-001 実測図及び出土遺物実測図



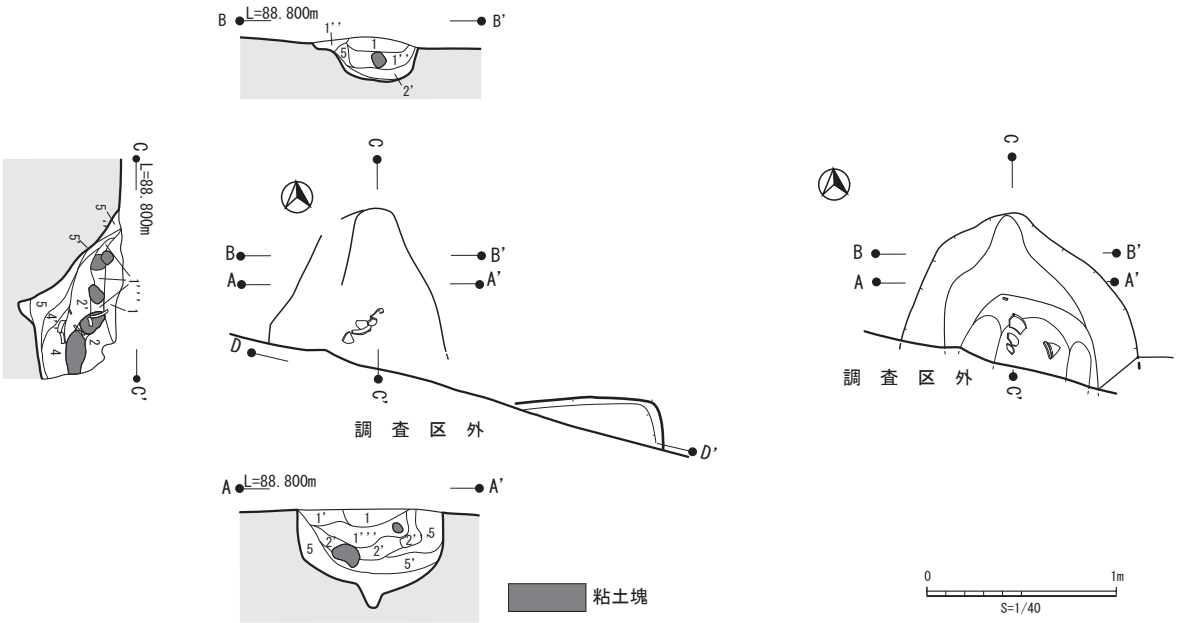


第 13 図　2 区　SI-002 実測図

SI-002竈



SI-003竈



第 14 図　2 区　SI-002竈実測図及びSI-003竈実測図

SB-001（第 19 図）

SB-001 は 2 間× 4 間の掘立柱建物跡である。建物跡の主軸は南北方向である。

SB-002（第 20 図）

SB-002 は 1 間× 2 間の掘立柱建物跡である。北東部にある桁部には、1 基の柱穴が加わり、2 間になっている。建物跡の主軸は北東～南西方向である。3 基の柱穴で柱痕跡を確認した。

SD-001（第 20 図）

SD-001 はほぼ南北方向に伸びる溝跡である。断面形は略台形を呈している。

SK-001（第 21 図）

SK-001 は平面形が略楕円形を呈しており、断面形は略台形である。

SK-002（第 21 図）

SK-002 は楕円形の平面形を呈している。断面形は二段で、一段目は深い皿状であり、二段目は一段目からさらに掘込んでおり、その断面形は筒状になっている。

SK-003（第 21 図）

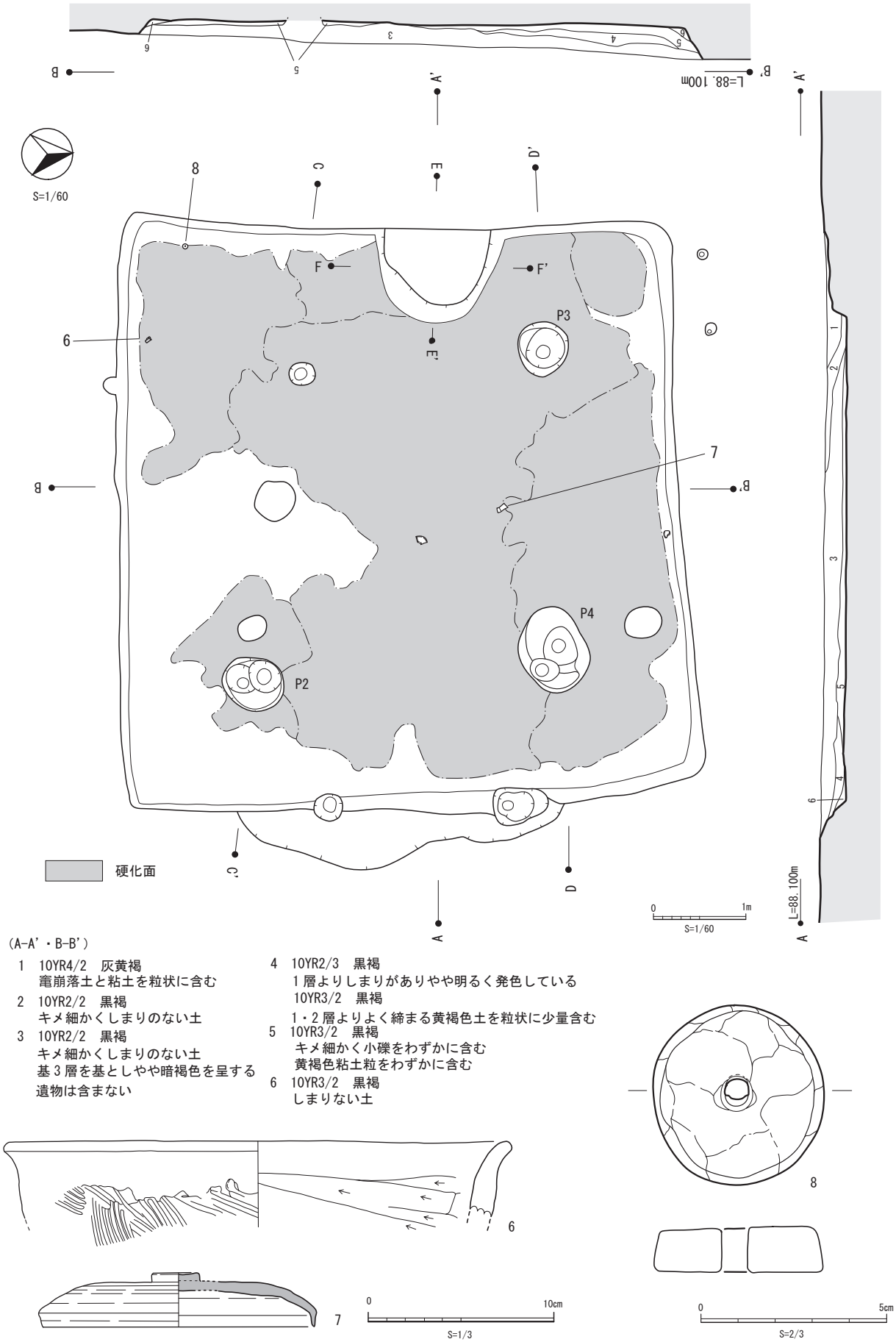
SK-003 は平面形が略円形を呈しており、断面形は深い皿状である。

円形周溝状遺構（第 18 図）

この遺構は北側のほぼ半分を検出しているが、残りは調査区外にある。検出した部分の平面形は略円形を呈している。断面形は二段になっており、一段目は浅く掘込み、平坦面をつくっており、二段目の断面形は深い皿状を呈している。

SX-001（第 21 図）

SX-001 は北側の一部分を検出し、残りは調査区外にある。検出した部分の平面形は楕円形を半裁したような形状で、断面形は皿状を呈している。



(A-A'・B-B')

1　10YR4/2　灰黄褐
　竈崩落土と粘土を粒状に含む

2　10YR2/2　黒褐
　キメ細かくしまりのない土

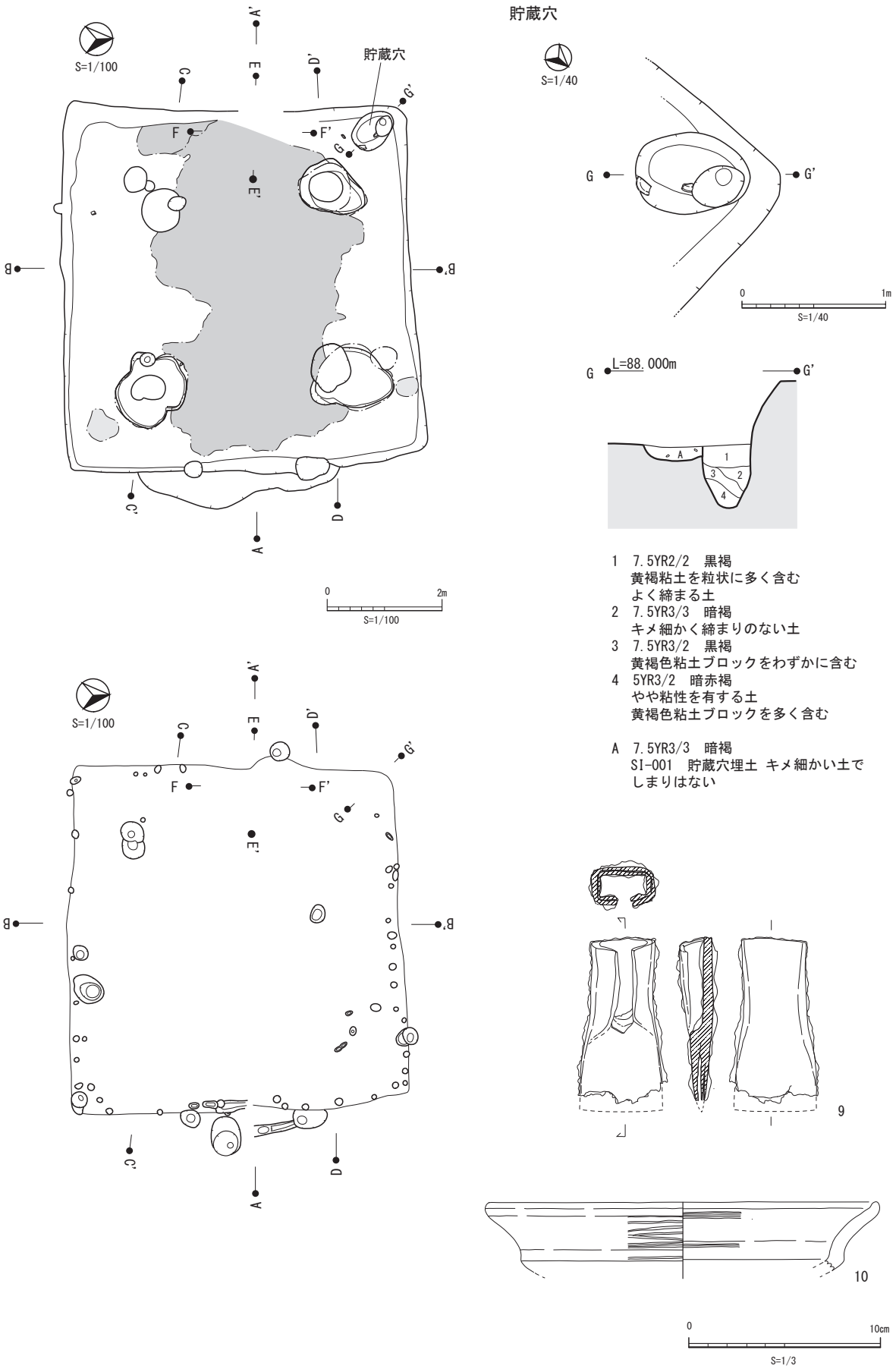
3　10YR2/2　黒褐
　キメ細かくしまりのない土
　基3層を基としやや暗褐色を呈する
　遺物は含まない

4　10YR2/3　黒褐
　1層よりしまりがありやや明るく発色している
　10YR3/2　黒褐
　1・2層よりよく締まる黄褐色土を粒状に少量含む

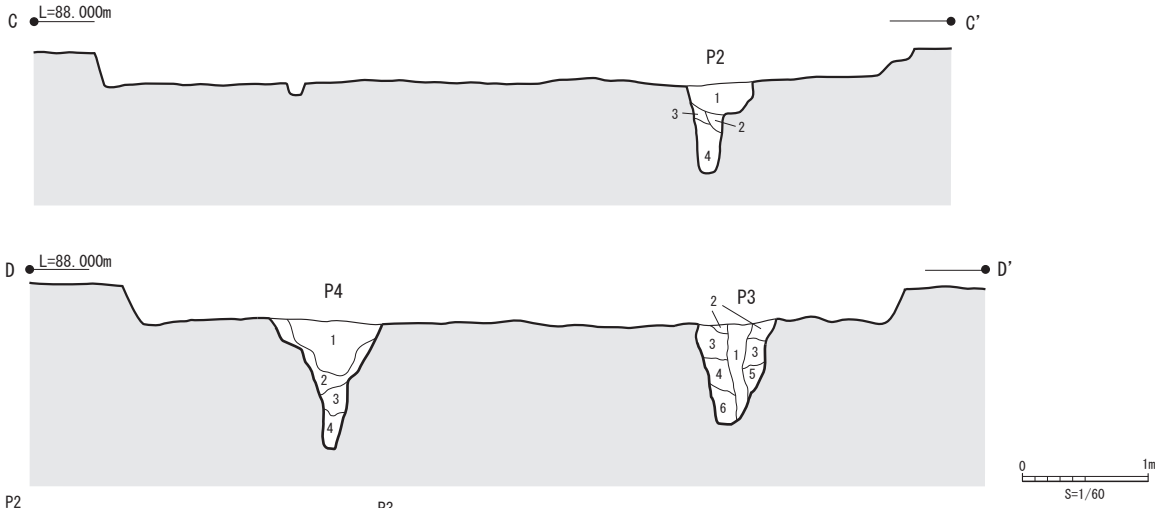
5　10YR3/2　黒褐
　キメ細かく小礫をわずかに含む
　黄褐色粘土粒をわずかに含む

6　10YR3/2　黒褐
　しまりない土

第 15 図　3 区　SI-001 実測図及び出土遺物実測図



第 16 図　3 区　SI-001 二枚目硬化面範囲図・完掘図・貯蔵穴実測図及び出土遺物実測図



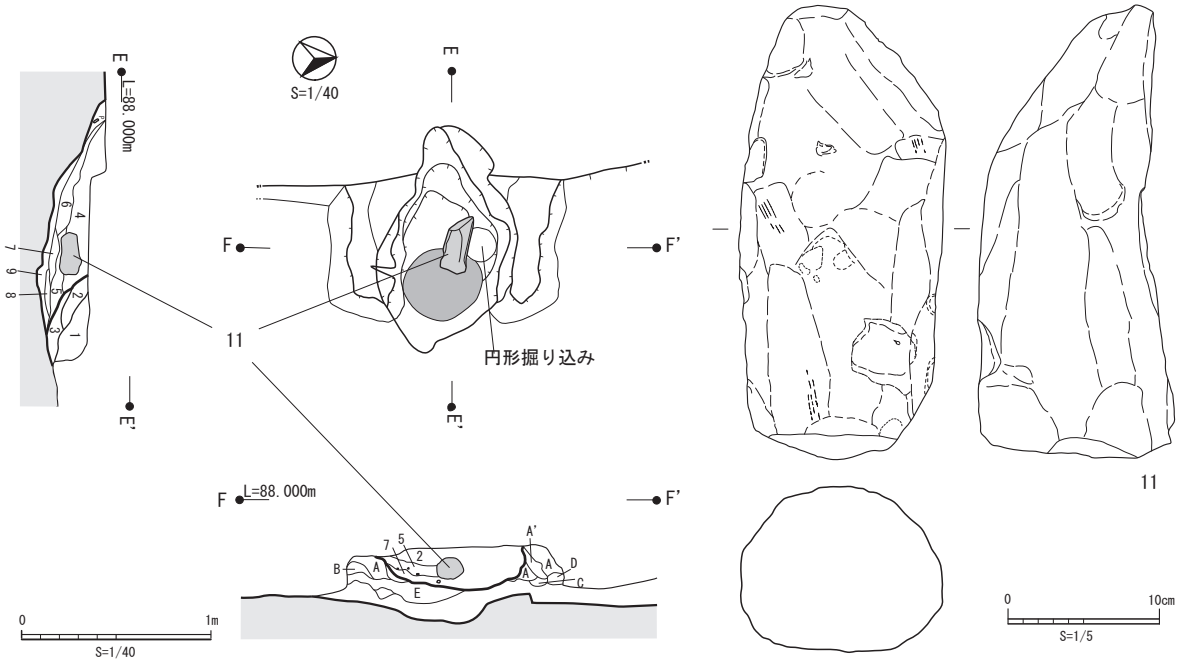
P2
1 7.5YR3/2 黒褐
褐色粘土を粒状に多く含む
2 10YR4/3 にぶい黄褐
他の土の混入は見られない
3 10YR3/2 黒褐
褐色粘土をブロック状に多く含む
そのためよく締まる
4 7.5YR3/2 黒褐
3層とよく似る土がベースとなる
褐色粘土を粒状に含むが締まりはない

P3
1 7.5YR2/2 黒褐
本遺構内ではしまりのない土
樹痕と見られる
2 7.5YR2/3 極暗褐
褐色粘土ブロックを粒状に少量含む
よく締まる土
3 10YR3/3 暗褐
ニガ土をブロック状に含みよく締まる
褐色粘土ブロックを粒状にごく少量含む
4 7.5YR3/2 黒褐
褐色粘土をブロック状に含むためよく締まる
5 10YR3/2 黒褐
粘性のある土の混入が見られなくしまりは弱い
6 10YR4/2 灰黄褐
褐色粘土（ロ-ム）層に掘り込まれているためか
水分が多く粘性を有する

P4
1 7.5YR3/2 黒褐
キメ細かな土「基3層」に近い土である
褐色粘土を粒状にごく少量含む
2 10YR3/3 暗褐
褐色粘土をブロック状に多く含むためよく締まる層
3 10YR2/2 黒褐
キメ細かく他の土の混入は見られない
そのためか土に締まりはない
4 7.5YR4/2 灰褐
P3最下層と同様の性質を有する土

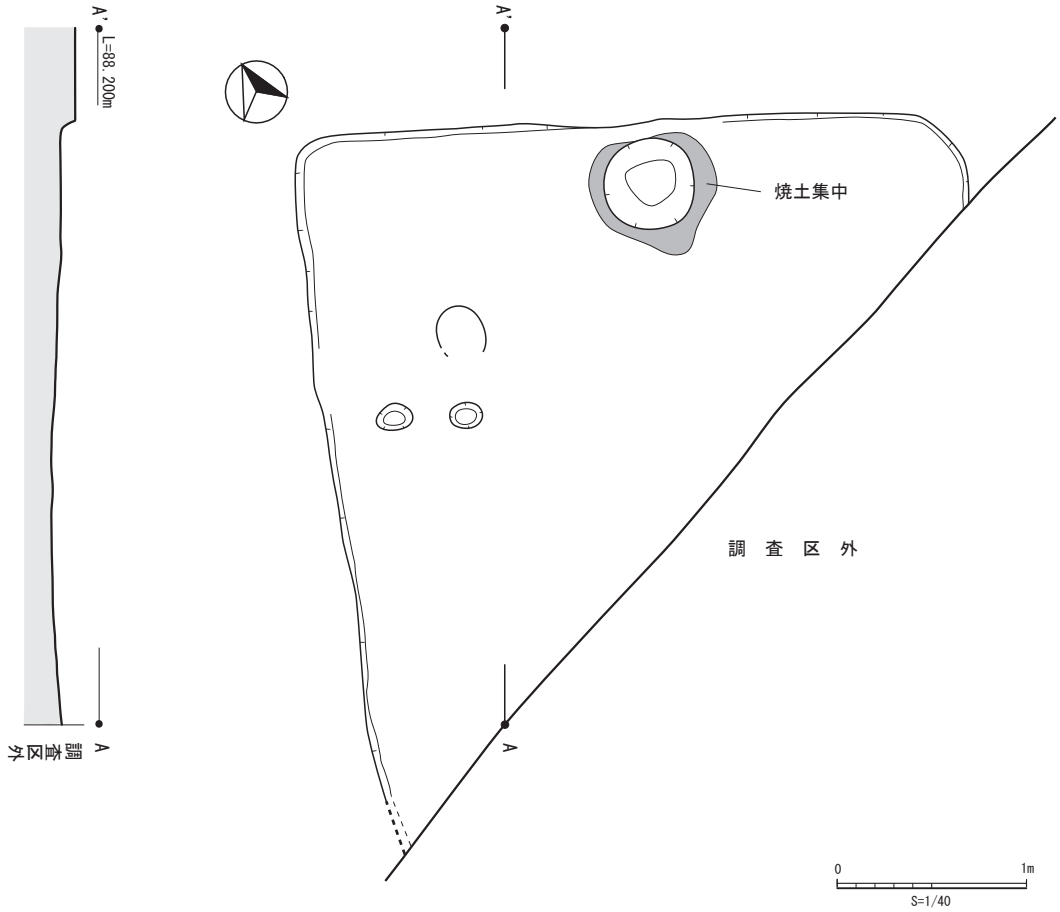
SI-001 竈
1 7.5YR7/1 明褐灰色粘質土 / 2 10YR6/2 灰黄褐色粘質土
竈の崩落土 明赤褐色粘土焼土ブロックを
わずかに粒状に含む
土壌化したためか両層とも粘性はない
3 7.5YR4/2 灰褐
土壌化した土が焼土粒と混土され明るく発色する
明赤褐色粘土焼土ブロックを径3～5cmの塊で含む
4 7.5YR4/2 灰褐
明赤褐色粘土を粒状にまんべんなく含む
キメ細かな白粘土層が土壌化しつつある層
5 2.5YR5/6 明赤褐色粘土
粘土がよく焼け赤化したブロック土
竈内面の崩落土
6 5YR4/2 灰褐
明赤褐色粘土をキメ細かに粒状にまんべんなく含む
7 2.5YR4/4 にぶい赤褐
土が焼け赤化した層 粘土焼土ブロックを
粒状にわずかに含む

A 7.5YR6/1 褐灰色粒粘土
竈本体構成粘土
A' 7.5YR6/1 褐灰色粒粘土
竈本体構成粘土
中に入った樹根か色調に
変わりはないが非常に
柔らかい
B 10YR6/2 灰黄褐色粘土
竈本体構成粘土
C 10YR5/2 灰黄褐色粘土
竈本体構成粘土
D 7.5YR5/2 灰褐色粘土
竈本体構成粘土
E 7.5YR4/2 灰褐

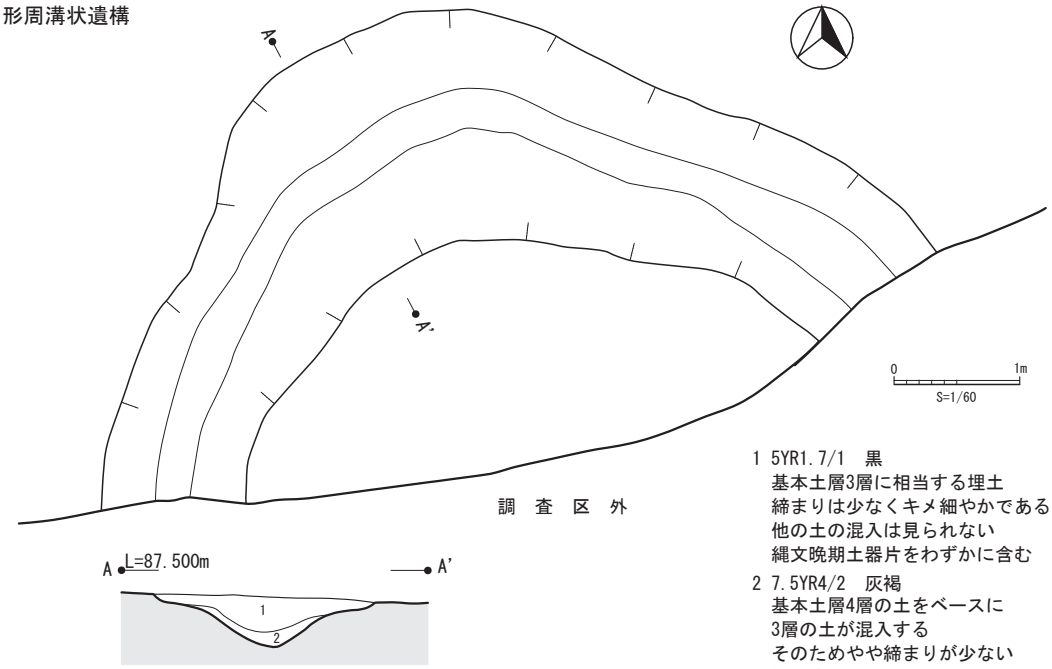


第 17 図 3区 SI-001 P2～4断面図・竈実測図及び出土遺物実測図

SI-002



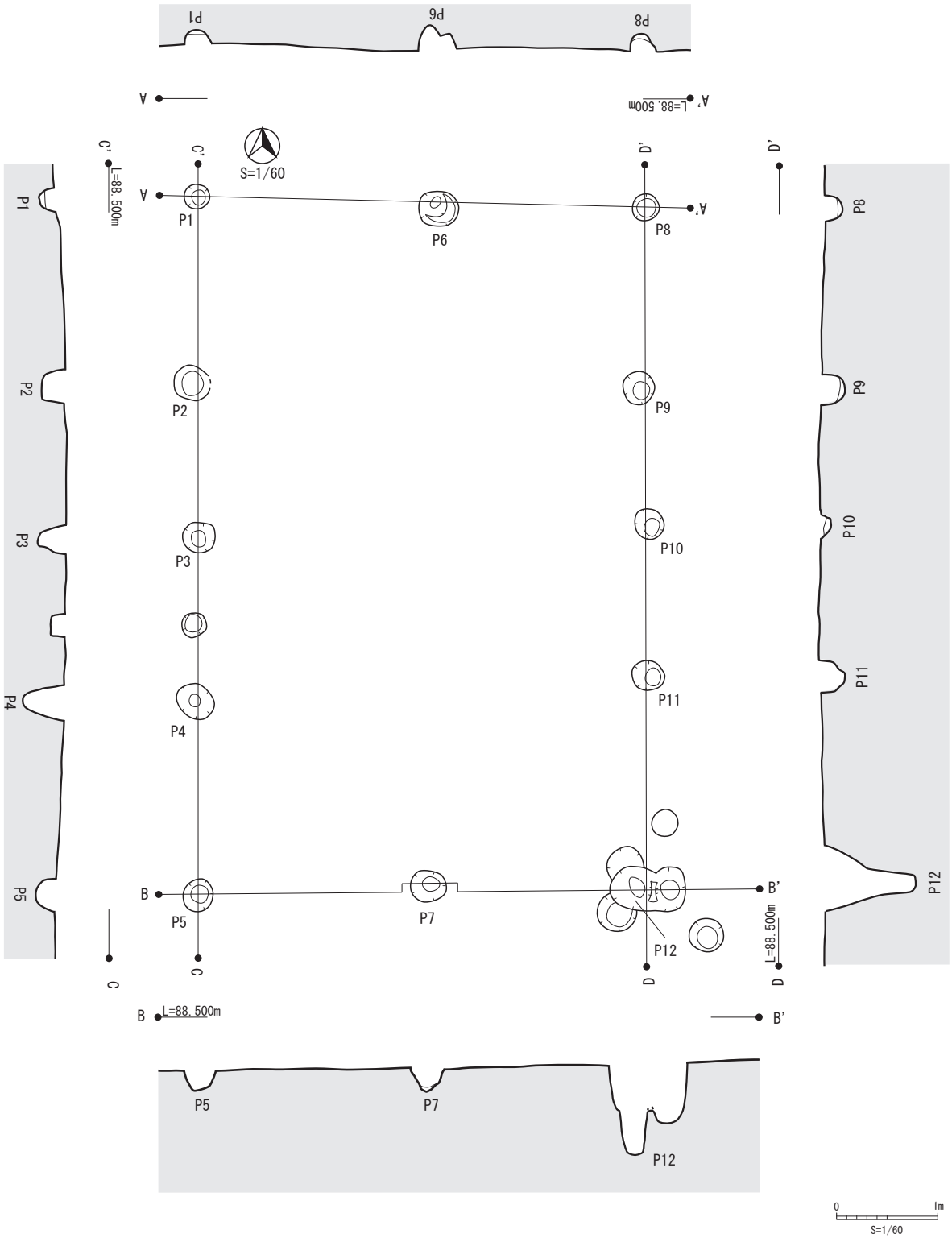
円形周溝状遺構



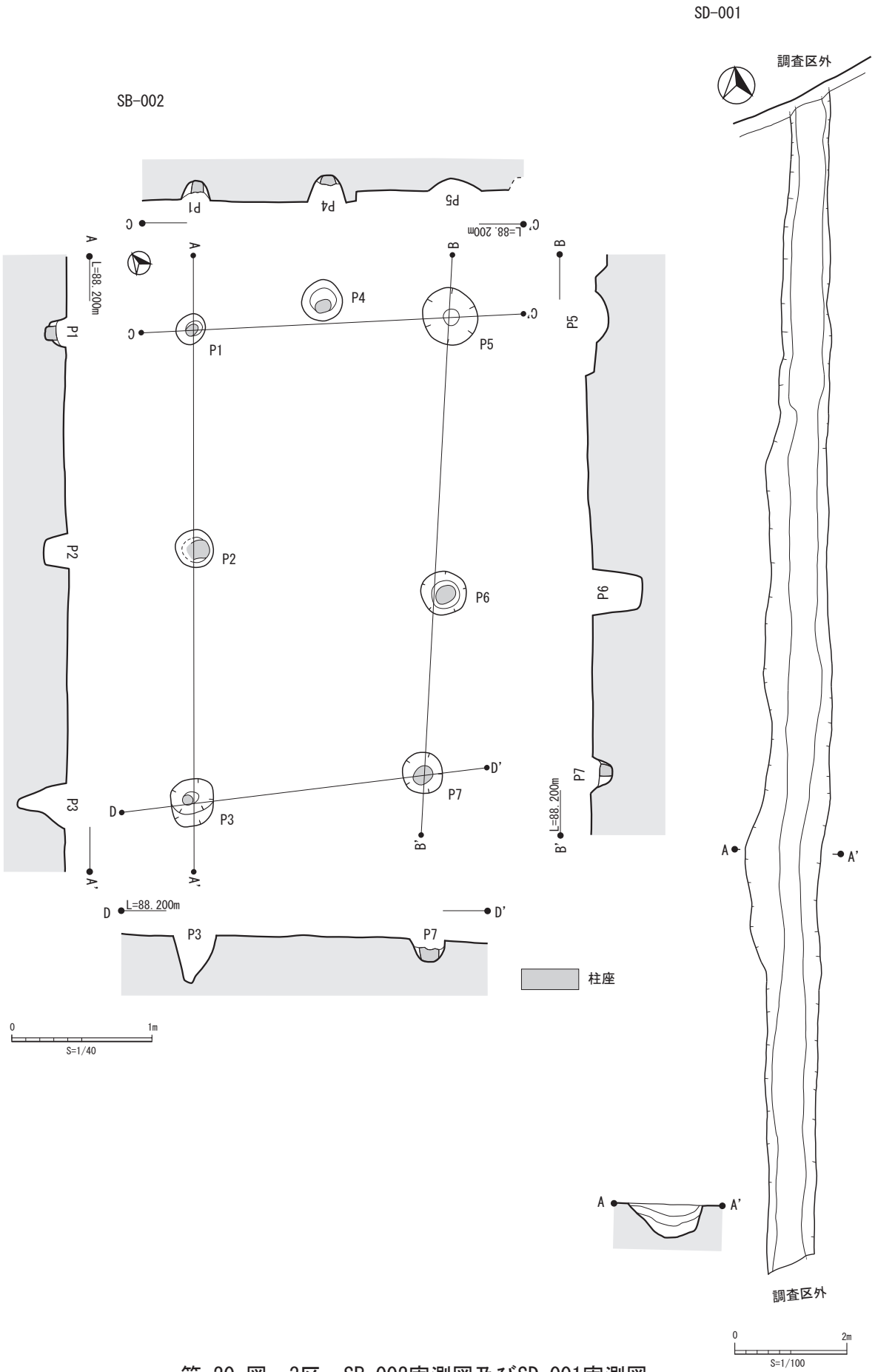
1 5YR1.7/1　黒
基本土層3層に相当する埋土
締まりは少なくキメ細やかである
他の土の混入は見られない
縄文晩期土器片をわずかに含む

2 7.5YR4/2　灰褐
基本土層4層の土をベースに
3層の土が混入する
そのためやや締まりが少ない
縄文晩期土器片（1層に比べ小片）を
わずかに含む

第 18 図　3区　SI-002実測図及び円形周溝状遺構実測図

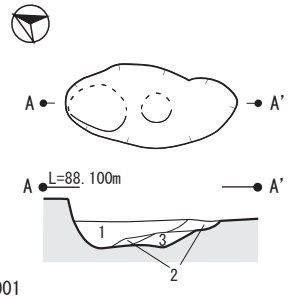


第 19 図　3 区　SB-001 実測図



第 20 図　3区　SB-002実測図及びSD-001実測図

SK-001



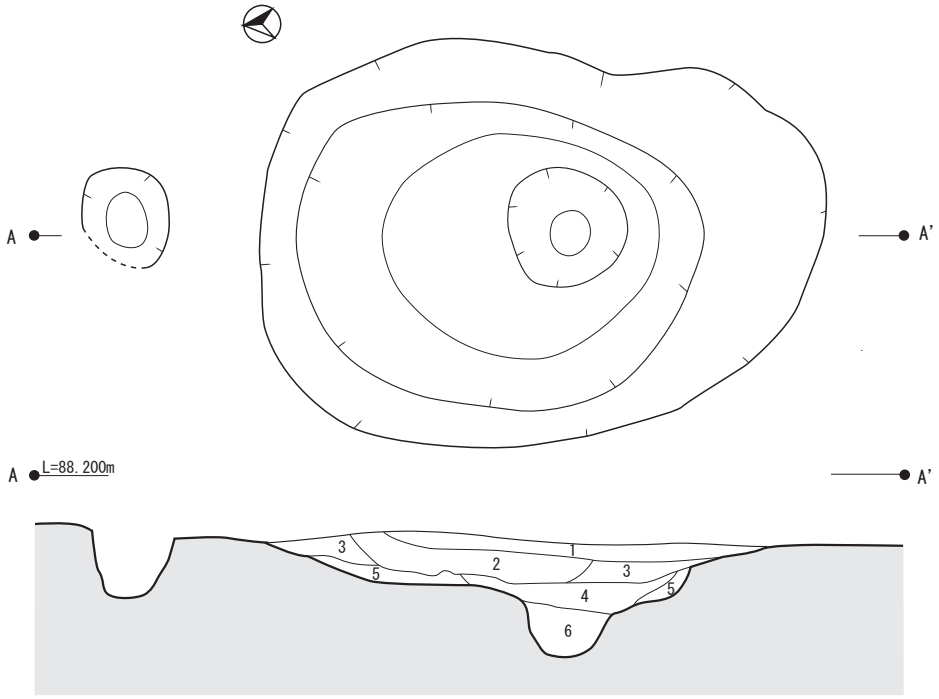
SK001

1　10YR4/2　灰黄褐
　ややシルト質であり粘性を持つ
　堆積時の作用によるものか
2　10YR1.7/1　黒色炭化物
　3層の土と混土するように入る　炭化物のみ黒
3　7.5YR3/2　黒褐
　2層の黒色炭化物をわずかに粒状に含む

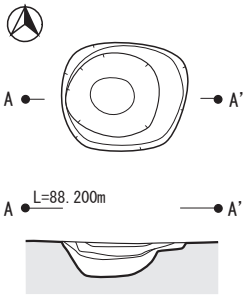
SK-002

1　7.5YR4/6　褐
　焼けた粘土ブロックを少量含むとともに粘土粒（焼けている）を層中にまんべんなく含む
　木片の炭化物をわずかに含む
2　7.5YR3/4　暗褐
　焼けた粘土ブロック及び焼けた粘土を粒状に多く含む
　木片の炭化物をブロック状に含む
3　7.5YR3/4　暗褐
　焼けた粘土粒を全体にまんべんなく含む　よって全体的に明るく見える
4　7.5YR3/4　暗褐
　2・3層に比べ焼けた粘土粒が少なくなっている
5　7.5YR3/4　暗褐
　焼けた粘土粒を含まない
6　10YR4/4　褐
　炭化物を粒状にわずかに含む

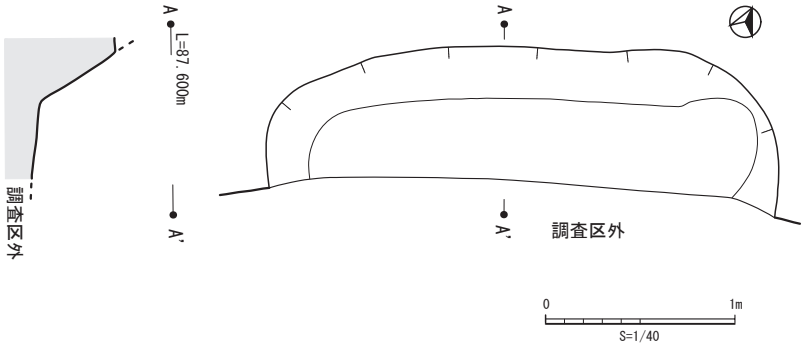
SK-002



SK-003



SX-001



第 21 図　3 区　SK-001 ～ 003・SX-001 実測図

第 4 節　遺物

ここでは、遺物包含層から出土した遺物を中心に記述する。補足的に表土から出土した遺物を取り上げる。遺物の詳細は第 3 表に記載しているので、ここには遺物の概観を記述する。

1　1 区出土遺物について（第 22 図）

12 ～ 15 は縄文土器の押型文土器片である。12・13・15 は外器面に楕円文を施す。14 は内外器面に楕円文がある。21 は土師器の鉢の口縁部から底部付近の破片である。口縁部は外に大きく開く。胴部は深みをもちながら丸くなる。20 は須恵器の高台付杯身の口縁部から底部にかけての破片である。外底部の高台を貼りつけた箇所で、高台部が欠損している。体部外器面の底部寄りの箇所には明確な稜があり、その上下で外器面の形状が変化している。下部はほぼ直線的に伸び、上部はやや内側に丸くなりながら口縁部にいたる。外底部にはヘラ記号が刻まれている。22 は陶磁器の口縁部から体部の一部にかけての破片である。唐津焼の油徳利であろうか。16 は縄文土器深鉢の口縁部から体部の一部にかけての破片である。口縁部は大きく内側に傾いており、外器面に浅い凹線文が三条巡る。口唇部には細くて浅い沈線文が施されている。17 は縄文土器深鉢の波状口縁部から体部の一部にかけての破片である。口縁部は短く内傾しながら立ち上がり、外器面に二条の沈線文があり、沈線文に挟まれた箇所と下方の沈線文の下位に縄文が部分的に残っている。波状口縁部の最高部には大きめの凹部がある。18 は縄文土器の深鉢底部片で、阿高式系の土器であろう。外底部には凹凸のある圧痕が残る。19 は縄文土器浅鉢の口縁部から体部の一部にかけての破片である。口縁部は頸部から大きく内側に屈曲しながら立ち上がる。体部は僅かに外側に丸くなりながら底部に向かって伸びている。

45 は横長剥片を利用した石匙である。上辺のやや端部寄りの箇所につまみを作り出している。下端部には表裏面の縁辺部からの丁寧な剥離を施して刃部としている。44 は平面形が不整な二等辺三角形をした小型の石鏃である。46 は縦長剥片を利用したサイドスクレイパーである。刃部には表裏面からの細かな剥離を加えている。

2　2 区出土遺物について（第 23 図）

27 は須恵器の高台杯身底部から体部の一部にかけての破片である。高台の断面形は短くハの字形を呈しており、接地面は平坦である。外底部には二条の沈線を刻んだヘラ記号がある。26 は須恵器の高台付杯身の口縁部から底部にかけての破片である。高台の断面形は短くハの字形を呈し、接地面は中央部が僅かに窪む。体部は底部からほぼ直線的に外に開きながら立ち上がっている。口縁端部は丸く調整されている。23 は縄文土器の深鉢片である。底部から体部の一部分にかけての破片である。体部は外反しながら立ち上がる。底部は浅い上げ底である。25 は土師器の杯身であり、体部を部分的に欠いている。外底部には回転ヘラ切りの痕が確認できる。体部は外反しながら直線的に口縁部まで立ち上がり、口縁端部は丸くなる。体部内外器面は弱い凹凸がある。24 は口縁部が一部分残っている土師器の杯身片である。外底部には回転ヘラ切りの痕が残っている。体部が僅かに内側に丸くなりながら伸び、丸い口縁端部に至る。28 は須恵器の壺の口縁部片である。残っているのは頸部から口縁端部付近にかけての部分である。口縁部は中程まで外反しながらほぼ直線的に伸び、そこから外に大きく開きながら口縁端部付近まで続く。29 は磁器の鉢口縁部片である。体部は薄く、外反しながら伸びている。30 は磁器椀の口縁部から底部にかけての破片である。体部はほぼ垂直に立ち上がる。

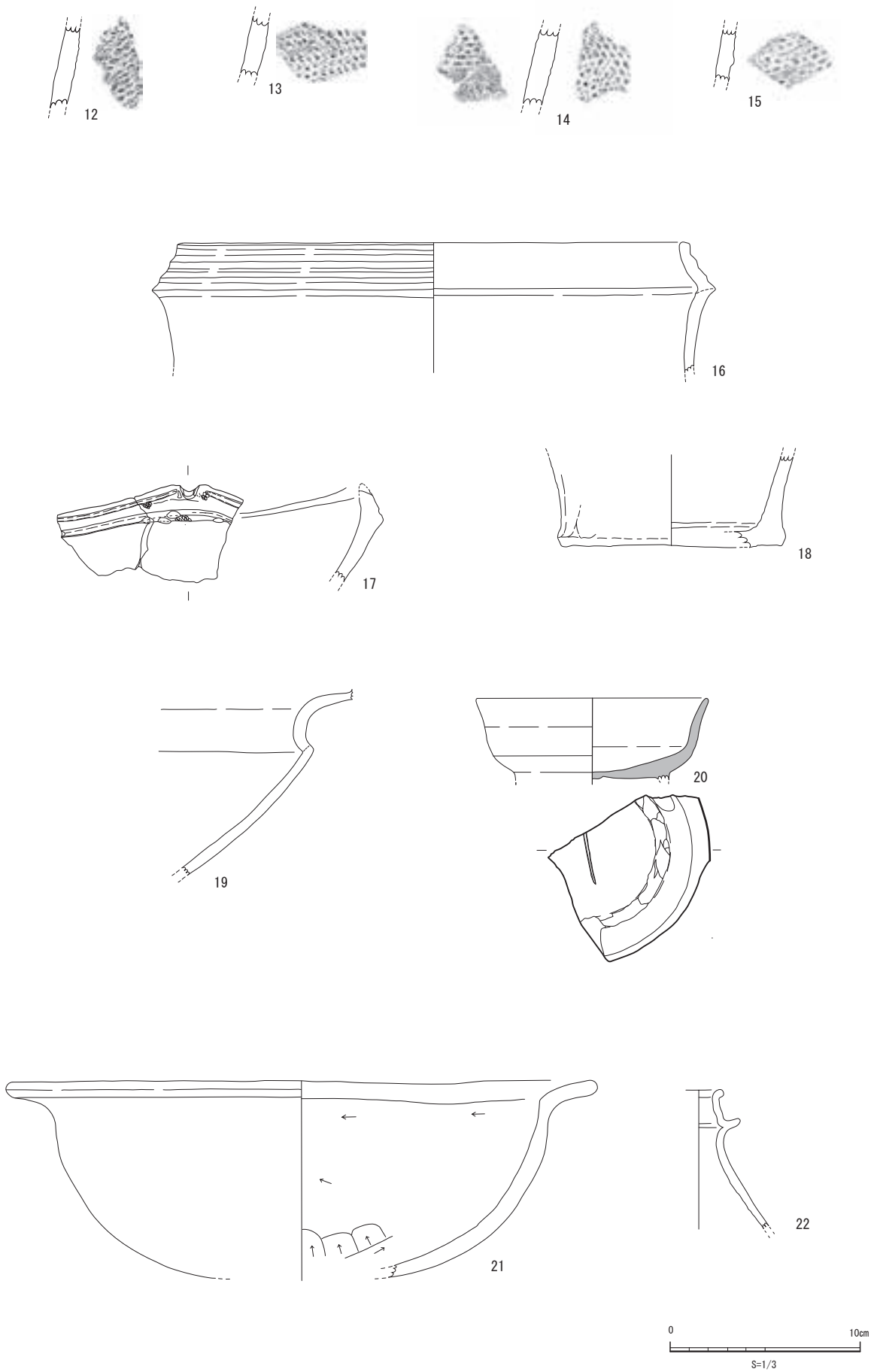
41 は縦長剥片を用いた角錘状石器である。左右側辺には縁辺部からの剥離を行っている。47 は縦長剥

片を利用した石錐の体部片である。先端部が欠損している。

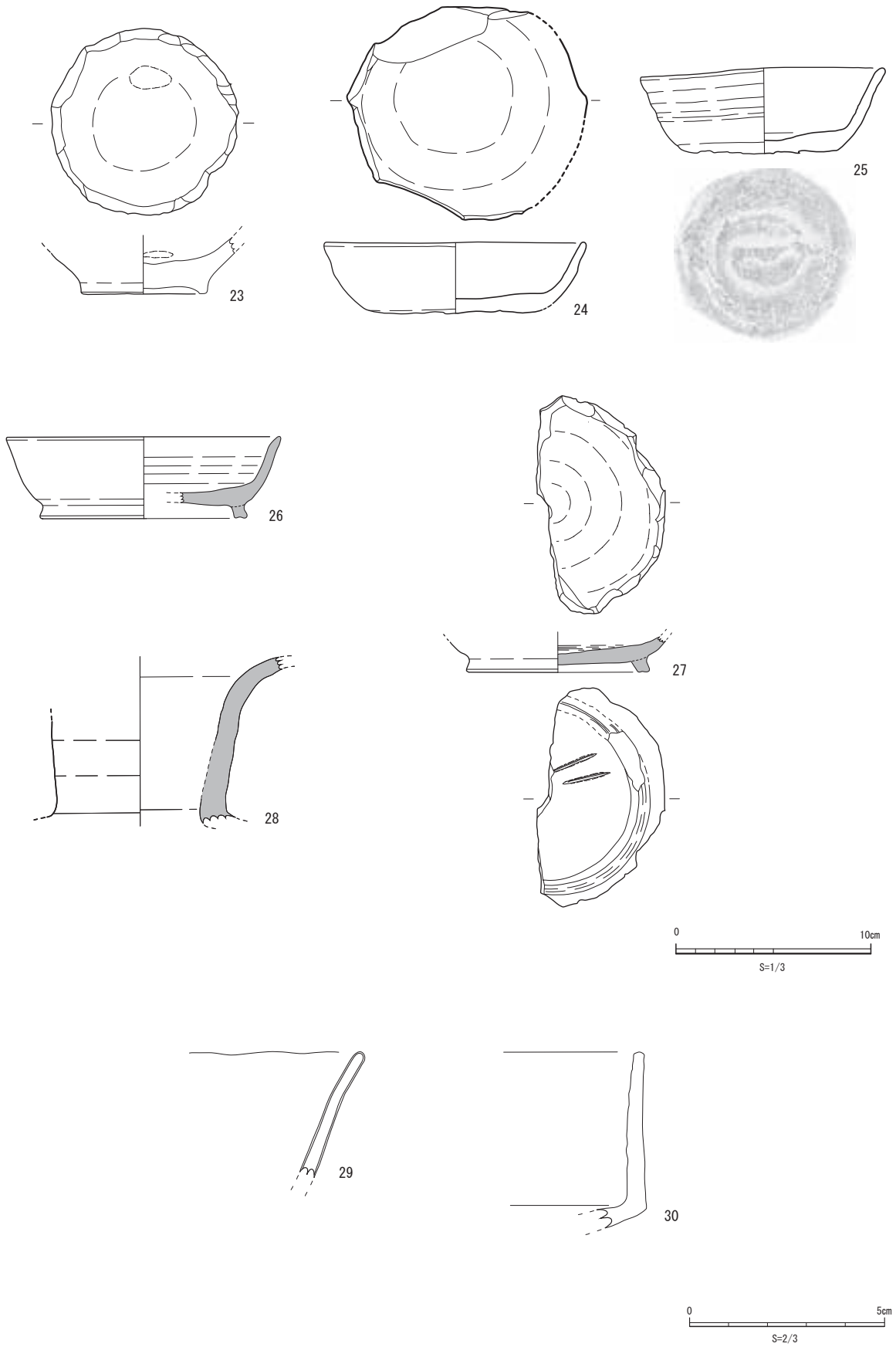
3　3区出土遺物について（第24図）

34は不完全焼成品の須恵器の高杯片であろうか。脚部の断面形はハ字形を呈しており、端部は丸くなり、内器面の端部寄りの箇所に窪みをもち段を形成する。33は土師器の甕の口縁部片である。外に向かって大きく開いており、端部は丸く仕上げている。31は縄文土器の深鉢口縁部片である。外器面に文様がある。端部付近には横位の沈線文が二条あり、楕円形の刺突文1個がこの沈線文のほぼ中央にある。横位の沈線文の下部には縦方向の短い沈線文を刻んでいる。32は土師器の甕の口縁部から体部の一部の破片である。口縁部は、くの字形に大きく屈曲し、端部は丸くなる。外器面全面と口唇部に赤色顔料が残る。37は青磁の高台付椀の底部片である。底部は分厚く、高台の残りは部分的である。36は土師器の小型壺片である。底部から頸部にかけての部位が残っている。体部は内側に丸く仕上げている。35は土師器の椀片である。口縁部を欠いている。底部はほぼ平坦で、体部は底部から内側に丸くなりながら立ち上がっている。38は須恵器大甕の頸部から口縁部の破片である。口縁部は頸部から大きく外に開きながらほぼ直線的に立ち上がる。40は白磁鉢の口縁部片である。口縁部は大きく外反しながら伸び、端部は内器面でやや窪み、丸くなる。39は縄文時代の土偶片で、頭部と考えられる。頭頂部に丸い刺突文があり、そこから右側面には二条の沈線文、左側面には一条の沈線文が施される。顔正面にあたる箇所には二条の沈線による何らかの表現が確認できる。48は石製の装飾品と考えられる。円形の装飾品のほぼ半分が残っていると思われる。ほぼ中央部には表裏面から穿った円形の穴がある。

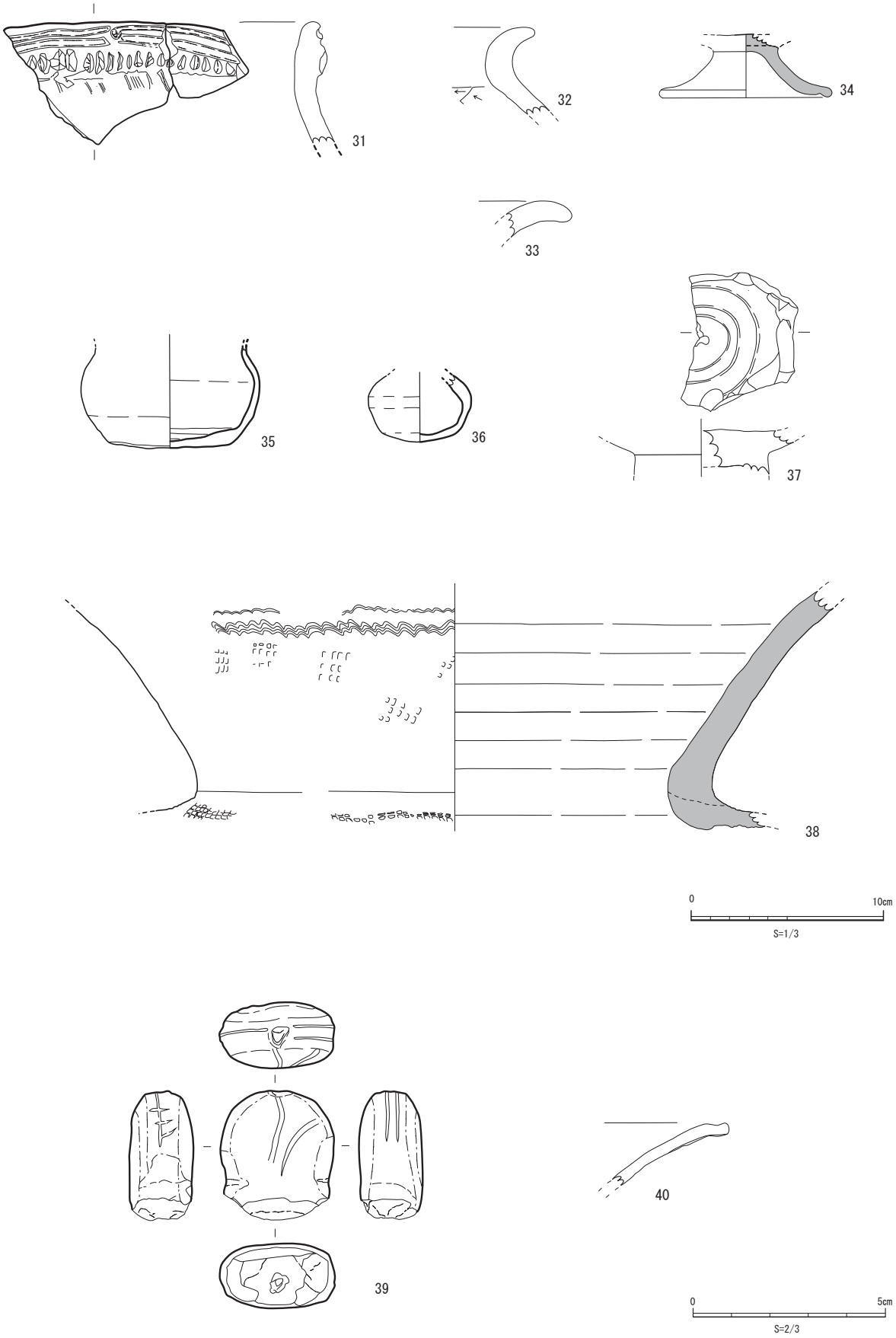
42は平面形が二等辺三角形をした石鏃片である。先端部が僅かに欠損している。43は平面形が略正三角形をした石鏃片である。先端部が欠損している。



第 22 図　1 区　出土遺物実測図



第 23 図　2 区　出土遺物実測図



第 24 図　3 区　出土遺物実測図

第 25 図　1 区～ 3 区　出土遺物実測図

第Ⅳ章　総括

【調査成果】

今回、発掘調査を行った1区・2区・3区についての調査成果をまとめる。

確認した主な遺構は、竪穴建物跡、掘立柱建物跡である。また、ほぼ南北方向に伸びている溝跡や道路跡は、ほぼ南北方向の主軸をもつ掘立柱建物跡や竪穴建物跡と同時期のものであると判断できる。これらの遺構の時期は出土遺物から8世紀前半～8世紀後半頃と考えることができる。最大で5回の建替えを行っている竪穴建物跡の存在やそれに付随する遺構の存在から、今回調査を実施した箇所は、同じ場所に建物を建て、その場で集団生活を営んだ場所である集落跡の一部である。この集落における遺構分布状態や遺構密集状況を見ると、今回調査を実施した箇所は、古代集落跡の中心部ではなく、遺構があまり集中していない縁辺部にあたると考えることができる。現地形を観察すると、野入遺跡は今回の調査区から南側では台地の平坦面が広範囲ではなく、北側には平坦面が縦長に広がっている。そのため、集落跡の中心は生活の場を確保できる北側の平坦面に存在していると推定できる。

古代以外では、縄文時代後期～晩期の遺物がある。その中でも、土偶の頭部片と思われる土製品の存在は気になる。仮に出土したものが土偶であれば、今回の調査区の近くに、縄文時代後期～晩期の大規模な集落跡が存在する可能性がある。関連する同時代の遺跡として、野入遺跡の西側に、谷を間に挟んだ台地上に笹尾遺跡を挙げることができる。両遺跡は直線距離で約3㎞離れた場所にある。笹尾遺跡は土器・石器の出土量が多く、玉類や土偶も多量に出土することに特色がある。笹尾遺跡はこの地域の中心的な集落跡である。このような大規模遺跡に関連する縄文時代の遺跡として存在した可能性を推定できる。

さらに、古代、縄文時代以外の時代として、近世以降の時期が考えられる窪地跡を確認した。この遺構は地元で「ほりばたけ」と呼んでいるものである。

【植木地域の古代概観】

今回、発掘調査を実施した中で、野入遺跡の中心となるのは、古代の集落跡である。そのため、ここでは遺跡が立地する植木地域の古代を概観することでまとめとしたい。

律令制下において、肥後国名が初めて登場するのは、『日本書紀』持統十年(696)四月戊戌条の「肥後国皮石(合志)郡」である。奈良時代の肥後国は十三郡を管轄する上国であった。その後、平安京遷都の翌年である延暦十四年（795）九月には大国に昇格した。肥後国は奈良時代・平安時代を通じて西海道で唯一の大国である。

この肥後国の一つの郡である合志郡は、貞観元年（859）に、郡の西部である七郷を山本郡として分けた。郡域は現在の山鹿市鹿央町、熊本市植木町を中心として、合志市西合志町や菊池市泗水町の一部が含まれる。この山本郡内には西海道の駅路がほぼ南北に縦貫しており、陸上交通の要衝地であった。

この駅路西側の隣接した山口郷と呼ばれている場所に、山本郡衙の推定地がある。ここには「正院」の地名が残っており、布目瓦が採取されている（山口遺跡）。この郡衙推定地からさらに西側には一辺12～13mの基壇状の高まりを確認できる富応廃寺がある。その廃寺の平坦面に礎石が残っており、三間×三間の塔の可能性が指摘されている。布目瓦も多量に出土している。この廃寺は山本郡に関連する寺院の一つであると考えることができる。

上記の山本郡衙の推定地から北西方向に直線距離で約2㎞離れた地点の向原遺跡で最近、新たな発見があった。この遺跡は道路整備に伴って、旧植木町教育委員会（現在、熊本市教育委員会）が発掘調査を実施した。調査の結果、建物主軸を南北方向に揃え、もしくはこの方向と直角に建物を配置した規格性のある掘立柱建物跡群（9～10棟）を検出した。これらの建物の時期は9世紀前半～後半に考えられている。

さらに、これらの遺構に伴って出土した金銅製錠前と鍵等は注目すべきものである。その時期は9世紀後

半と考えられている。金銅製錠前等は、今回の出土で、全国で 10 例目であり、7 例は都城、国衙クラスの遺跡である。錠前はその材質によって、銀→金銅→銅→鉄のランクがあり、銀製が東大寺出土品、正倉院伝世品しかなく、当時の入手可能な製品としては金銅製が最もランクが高いものである。このようなランクのものがこの遺跡から出土したということは、当時の律令体制に組み込まれた組織の存在が想定できる。この遺跡の時期、規格性の高い遺構配置、出土遺物の高価さを考慮すると、貞観元年（859）の山本郡の設置時期とほぼ同時期であり、この遺跡はその設置に伴う官衙的機能を有した施設である可能性が高い。

この遺跡の南側の近接地点には豊田川が流れている。この遺跡の対岸には、堂附遺跡、吉部原遺跡、西土取遺跡、笠松遺跡、亀甲堀ノ内遺跡などの古代遺跡が存在する。堂附遺跡からは、蔵骨器・伯牙弾琴鏡などが出土している。吉部原遺跡では筑後地方と関係が深い「馬人」の線刻がある土師器が確認されている。西土取遺跡、笠松遺跡、亀甲堀ノ内遺跡では古代の遺構・遺物が検出されている。これに先述した郡衙推定地（山口遺跡）、富応廃寺を加えると、豊田川流域の古代遺跡は山本郡の中心地域の一つであったと考えることができる。

植木地域の古代は以上のような状況を呈している。この中にあって野入遺跡の存在は山本郡衙設置時期より以前の様相を示す資料の一つとすることができる。山本郡設置の要因を考察するには、その前提となる前時期の様相を明らかにする必要がある。山本郡の中で大きな位置を占めていたのが現在の熊本市植木町であるので、その地域の遺跡の状況から、人口の問題、経済力の問題などを考察することで、その課題解決が図られると思う。そういう意味で野入遺跡の発掘成果はその検討資料の一つを提供したことになるのではないかと考える。

（参考文献）

隈　昭志「第一章　原始・古代」『植木町史』1981 年
植木町教育委員会「塔ノ本遺跡　今古閑久保遺跡　滴水遺跡　轟城跡　ヲスギ遺跡」
『植木町文化財調査報告第 18 集』2004 年
板楠和子「西海道　肥後国」『日本古代史地名辞典』2007 年
熊本市教育委員会「瓜尾遺跡　向原遺跡」『熊本市の文化財　第 3 集』2011 年

遺 構 一 覧 表

出土遺物観察表

第 2 表　遺構一覧表

SB 一覧表

挿図	調査区		遺　構	規格 梁×桁	方　位	検出レベル m	グリッド	面積 ㎡（推定）	梁 m［平均値］	桁 P= ピット番号	備　　考
8	野入	1	SB001	2×3～	N-5°-W	89.700	d・e-3・4		C-D　1.9+1.95 [1.925]	E-F　1.75+1.75+2.0 [1.83] A-B　1.9	調査区外に延びる 可能性あり
19	野入	3	SB001	2×4	N-1°-E	88.000	L・M-10・ 11・12	30.05	P1-P6-P8 2.32+2.1［2.21］ P5-P7-P12 2.3+2.05［2.175］	P1-P2-P3-P4-P5 1.87+1.5+1.62+1.92 [1.727] P8-P9-P10-P-11-P12 1.8+1.38+1.5+2.05 [1.6825]	柱痕は確認できず
20	野入	3	SB002	1×2	N-45°-W	88.000	P-11・12	6.22	P1-P4-P5 0.94+0.9［0.92］ P3-P7［1.75］	P1-P2-P3　1.57+1.81 [1.69] P5-P6-P7　1.95+1.29 [1.62]	P1-P5 間にややずれて 中央に 1 基 P1・P2・P4・P5・P7 に 柱座検出 P1・P3・P7 で柱痕を 確認

SK 一覧表

挿図	調査区		遺　構	グリッド	法量 m（推定） 長　軸	短　軸	深　さ	平面形態	断面形状	備　　考
9	野入	1	SK001	a-3	0.61	0.46	0.140	(楕円形)	凹状ヵ	
9	野入	1	SK002	e-4	0.12	1.13	0.200	隅丸方形	皿状	
9	野入	1	SK003	a・b-4	(0.86)	0.173		(隅丸方形)	皿状	
9	野入	1	SK004	f-3	(1.1)	(1.1)		(長方形)		
9	野入	1	SK004 P1	f-3	0.44	0.43		円形	筒状	SK-004 内に存在
9	野入	1	SK004 P2	f-3	0.57	0.45		円形	筒状	
9	野入	1	SK006	e-4	0.67	0.45	0.260	楕円形	皿状	二段掘り
9	野入	1	SK007	f-3・4	1.77	0.61	0.77～0.98	楕円形	略台形	南側二段掘り
9	野入	1	SK008	f・g-2・3	0.35	0.93	0.440	長方形	略台形	
16	野入	3	SI001 内 貯蔵穴	K-13	0.80	0.57	0.18	楕円形	皿状	
21	野入	3	SK001	L-11	0.92	0.43	0.150	略楕円形	略台形	
21	野入	3	SK002	M-12・13	2.44	1.75	0.23/0.50	楕円形	一段目　皿状 二段目　筒状	他で焼けた粘土（焼）ブロックを 2 ～ 3 層中に多く含む
21	野入	3	SK003	P-11	0.7	0.6	0.180	略円形	皿状	

円形周溝状遺構

挿図	調査区		遺　構	グリッド	法量 m（推定） 長　軸	短　軸	深　さ	平面形態	断面形状	備　　考
18	野入	3	円形周溝状 遺構	E・F-14・15	3.5～	(7.0)	0.40	略円形	一段目　浅い掘込み 二段目　皿状	周溝内より縄文晩期土器が多く出土 調査区外に延びる

SI 一覧表

挿図	調査区		遺　構	グリッド	法量 m（推定） 長軸	短軸	深さ	面　積 ㎡（推定）	平面形態	断面形状	備　　考
5	野入	1	SI001	b・c-3・4	2.5～	2.5～			(方形)		SI の切り合いは上面 に 5 軒、その下に 1 軒
5	野入	1	SI002	b・c-3・4	4.65	2.9～			(方形)		
5	野入	1	SI003	b・c-3・4	2.90	2.55		7.39	(方形)		
5	野入	1	SI004	b・c-3・4	4.50	2.5～			(方形)		
5	野入	1	SI005	b・c-3・4					(方形)		
7	野入	1	SI006	b・c-3・4	4.20	3.70		15.54	(方形)		
12	野入	2	SI001	T・U-10	1.94～	4.03	0.29		隅丸方形	凹状	
13	野入	2	SI002	Q・R-8・9	4.68	4.50	0.35	20.61	方形	凹状	周辺より支柱痕と思わ れる小 Pit 検出
14	野入	2	SI003	R・S-10							殆ど調査区外に存在
15	野入	3	SI001	K・L-12・13	6.40	6.25	0.30	40.0	方形		北西隅に貯蔵穴 (SK 参照)
18	野入	3	SI002	O・P-12・13	3.5～	3.56		(12.46)	(方形)		遺構深度は浅い 調査区外に延びる

SF 一覧表

挿図	調査区		遺　構	グリッド	法量 m（推定）			断面形状	備　　考
					長軸	短軸	深さ		
10	野入	1	SF001	F-3・4・5	9.2	0.7～0.3	0.9	凸レンズ状	

SD 一覧表

挿図	調査区		遺　構	グリッド	法量 m（推定）			断面形状	備　　考
					長軸	短軸	深さ		
20	野入	3	SD-001	J・K-10～14	21.0	1.40	0.60	略台形	近世陶磁器片・鉄砲玉（西南の役）・縄文晩期土器出土 ほぼ南北方向に沿って延びる

SX 一覧表

挿図	調査区		遺　構	グリッド	法量 m（推定）			種　類	平面形態	断面形状	備　　考
					長軸	短軸	深さ				
10	野入	1	SX001	G～I-2～5	15.70	5～10.3	0.5～1.4			皿状	近世以降 ほりばたけヵ
21	野入	3	SX001	J・K-14	2.70	0.7～	0.500		（楕円形）	皿状	調査区外に延びる

第 3 表　出土遺物観察表（土器・鉄斧）

報番	実番	挿図番号	台帳番号	出土地点					種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				調査区	遺構	グリッド	層位	取上No.			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
1	9	5	082	1	SI-001　3層					鉢	(13.0)		7.9～	ナデ	ナデ	10YR8/4 浅黄橙	10YR8/4 浅黄橙	1㎜以下の砂粒・赤色粒を含む	手捏ね土器 口縁部の内外面一部に赤色顔料
2	12	6	239	1	SI-001　1層			No.1	土師器	甕	(31.4)		6.5～	回転ナデ	ナデ・ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	角閃石・長石・石英、 2～3㎜の粒子を含む	
			174	1	SI-001 竈3層			No.3											
3	10	6	240	1	SI-002　1層			No.1	土師器	甕	(16.4)		6.4～	横ナデ・ミガキ	横ナデ・ケズリ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	石英・長石・角閃石、1㎜以下の砂粒を少量含む	口縁部内側に煤付着
4	11	9	074	1	SK-002				土師器	甕	(21.9)		6.3～	ナデ	ナデ・ケズリ	5YR6/6　橙 (赤色顔料の色)	7.5YR7/4 にぶい橙	雲母・長石・石英・角閃石、 1～2㎜の砂を含む	表一面に赤色顔料 (ベンガラ)
5	19	12	408	2	SI-001　1層				土師器	坏身	13.1	8.4	3.4	回転ナデ	ナデ	5YR6/6　橙 (赤色顔料の色)	5YR6/6　橙 (赤色顔料の色)	石英・長石、赤色粒を含む	断面の色 7.5YR7/4 にぶい橙 内外面に赤色顔料 底部に板状圧痕
			478	2	SI-001　2層			No.1											
			419	2	SI-001														
			486	2	SI-002　P14														
6	31	15	567	3	SI-001				土師器	甕	(27.5)		4.0～	横ナデ・ハケ目	横ナデ・ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR5/2 灰黄褐	角閃石・雲母・石英 1㎜以下（まれに I ㎜大）の砂粒を含む	
			570	3	SI-001														
			593	3	SI-001　床直			No.5											
			663	3	SI-001　P9														
7	28	15	535	3		K12	Ⅲ		須恵器	坏蓋	14.7		2.9	回転ヘラケズリ 回転ナデ	ナデ・回転ナデ	5Y6/2 灰オリーブ	5Y6/2 灰オリーブ	1㎜大の砂粒を多く含む	つまみ径 1.3cm
			537	3		K13	Ⅲ												
			584	3	SI-001			No.2											
9	33	16	634	3	SI-001 2枚目硬化面下				鉄斧		全長 8.5～	最大幅 (4.3)	最大厚 1.2						刃部は錆で鉄板が浮上り欠損し亀裂が入る 着柄口は錆で亀裂が入る 袋状に着装部を折り曲げ鍛造
10	14	16	339	1		d4	Ⅳ		土師器	高坏 (杯部)	(20.6)		4.6～	回転ナデ後ミガキ	回転ナデ後ミガキ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/3 にぶい橙	石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	内外面に赤色顔料 外面 5YR4/3 にぶい赤褐 内面 5YR3/3 暗赤褐
			654	3	SI-001 貯蔵穴														
			567	3	SI-001														
12	1	22	076	1		f3	Ⅳ		縄文土器	深鉢			2.7～	楕円押型文	ナデ	10YR5/2 灰黄褐	10YR6/3 にぶい黄橙	石英・角閃石・長石	
13	2	22	008	1	SX-001				縄文土器	深鉢			3.1～	楕円押型文	ナデ	7.5YR5/2 灰褐	10YR6/3 にぶい黄橙	石英・角閃石・長石	
14	3	22	008	1	SX-001				縄文土器	深鉢			4.0～	楕円押型文	楕円押型文・ナデ	7.5YR5/3 にぶい褐	10YR6/3 にぶい黄橙	石英・角閃石・長石	
15	4	22	273	1	SX-001				縄文土器	深鉢			2.1～	楕円押型文	ナデ	7.5YR6/4 にぶい橙	10YR6/3 にぶい黄橙	石英・角閃石・長石	
16	6	22	302	1		f4	Ⅳ		縄文土器	深鉢	(27.0)		6.9～	横ナデ・ミガキ	横ナデミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙 一部 10YR1.7/1 黒	2.5Y6/4 にぶい黄 一部 2.5Y5/1 黄灰	角閃石・石英・長石	
17	7	22	045	1		b5	Ⅲ		縄文土器	深鉢			5.2～	磨消縄文・沈線 ナデ・ミガキ	横ナデ・ミガキ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/4 にぶい橙	角閃石・長石	
			323	1		b5	Ⅳ												
18	5	22	325	1		d5	Ⅳ		縄文土器	深鉢		(11.6)	4.6～	下から上にナデ	ナデ	7.5YR4/4　褐	7.5YR5/4 にぶい褐	雲母・石英・長石・輝石・角閃石 1～2㎜の粒子を多く含む	阿高式系　外底部に圧痕
19	8	22	048	1		c5	Ⅲ		縄文土器	浅鉢			7.0～	横ミガキ	横ミガキ	10YR7/3 にぶい黄橙	2.5Y6/3 にぶい黄 2.5Y3/1 黒褐	1㎜以下の砂粒をわずかに含む	
		22	047	1		c5	Ⅲ												
		22	214	1		c4	Ⅲ～Ⅳ												

（土器・陶磁器・土偶）

報番	実番	挿図番号	台帳番号	出土地点					種別	器種	法量（cm）			調整		色調		胎土	備考
				調査区	遺構	グリッド	層位	取上No.			口径	底径	器高	外面	内面	外面	内面		
20	15	22	154	1		d4	Ⅲ		須恵器	高台付杯身	(12.3)		4.3～	回転ナデ	回転ナデ・ナデ	2.5Y6/2 灰黄	2.5Y6/3 にぶい黄	わずかに石英・黒色粒を含む	底部にヘラ記号 高台打欠き
21	13	22	096	1		e5	Ⅲ		土師器	鉢	(31.2)		10.4～	回転ナデ	回転ナデ・ケズリ	7.5YR6/4 にぶい橙	7.5YR6/3 にぶい褐	石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	口縁部内面の一部、外面に黒斑
			027	1		e5	Ⅲ												
			025	1		e4	Ⅲ												
			052	1		e4	Ⅲ												
22	38	22	079	1		f4	Ⅳ層		陶器	油徳利	(2.6)		7.3～	回転ナデ後施釉	回転ナデ後施釉・回転ナデ	C-126 枯葉色（羅漢果の色）	無釉 C-113 チョコレート色	粒子細かく不明	施釉 唐津焼ヵ
23	18	23	438	2		09	Ⅲ		縄文土器	深鉢		6.5	2.9～	ナデ	ナデ	7.5YR6/6 橙	10YR5/2 灰黄褐	石英・長石・角閃石・輝石 1㎜以下の砂粒を含む	底部の周りを打欠いて瓦玉状
24	21	23	359	2		S9	Ⅲ		土師器	坏身	(13.5)	8.2	3.7	摩耗の為不明	摩耗の為不明	5YR6/6 橙	7.5YR6/4 にぶい橙	赤色粒を含む	底部ヘラ切り
			345	2			清掃												
25	20	23	346	2			表土ハギ		土師器	坏身	12.6	8.2	4.4	回転ナデ	ナデ	5YR6/6 橙（赤色顔料の色）	5YR6/6 橙（赤色顔料の色）	石英・長石・角閃石・赤色粒を含む	内外面に赤色顔料 底部回転ヘラ切り （粘土塊残る）
26	17	23	360	2		S9	Ⅲ		須恵器	高台付坏身	(14.2)	(10.7)	4.2	ヘラケズリ後ナデ・ナデ	回転ナデ・ナデ	10YR6/2 灰黄褐	10YR6/2 灰黄褐	石英、1㎜大の砂を少量含む	表面一部に自然釉
27	16	23	397	2		S10	Ⅲ～Ⅳ		須恵器	高台付杯身		(9.4)	1.8～	ヘラケズリ ナデ	ナデ	10YR6/3 にぶい黄橙	10YR6/3 にぶい黄橙	1～1㎜以下の砂を含む	生焼け 底部にヘラ記号 打欠き
28	22	23	100	2			表土ハギ		須恵器	壺			7.1～	回転ナデ	回転ナデ	10YR6/1 褐灰	10YR5/1 褐灰	1㎜以下の砂粒、黒色粒を含む	内外面の一部に自然釉 頸部径　8.9cm
29	35	23	101	2			表土ハギ		磁器	染付小鉢	(12.0)		3.2～			呉須 C-255 縹色（はなだいろ）			施釉　肥前系 江戸後期ヵ
30	36	23	501	2・3					磁器	染付コロ茶椀	(7.6)		4.5～			呉須 C-297 灰色			施釉　肥前系 土手下溝から出土
31	25	24	657	3		K13	Ⅳ		縄文土器	深鉢			6.3～	ナデ	ナデ・ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英・角閃石・長石、1㎜以下の砂粒を含む	口縁部に2条の沈線、刺突文、粘土紐貼付後連続刺突文
			675	3		K13	Ⅳ												
32	26	24	125	3		I13	Ⅲ		土師器	甕			4.6～	回転ナデ	回転ナデ ケズリ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/3 にぶい黄橙	石英・長石・角閃石、1～2㎜の砂粒をわずかに含む	表面～口縁部内面に赤色顔料（5YR5/6 明赤褐）
33	24	24	673	3		K12	Ⅳ～Ⅴ		土師器	甕			1.9～	回転ナデ	回転ナデ	10YR7/3 にぶい黄橙	10YR7/4 にぶい黄橙	雲母・石英・赤色粒を含む	口縁部内側一部黒変
34	23	24	685	3					須恵器	高坏（脚部）		(9.0)	3.3～	摩耗の為不明	摩耗の為不明	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	1㎜以下の砂粒をわずかに含む 赤色粒を含む	不完全焼成品
35	30	24	528	3		J14	Ⅲ		土師器	椀		6.4	5.3～	摩耗の為不明 ケズリヵ	摩耗の為不明	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/6 橙	1㎜以下の砂粒・赤色粒を含む	底部回転ヘラケズリ
36	29	24	589	3		J14	Ⅳ		土師器	小型壺			3.5～	摩耗の為不明	ケズリ後ナデ	7.5YR7/4 にぶい橙	7.5YR7/4 にぶい橙	1㎜以下の砂粒・赤色粒を含む	
			604	3		J12	Ⅳ												
37	27	24	125	3		I13	Ⅲ		磁器	高台付椀		(3.5)	2.3～			C-216 すずかけの樹の色	C-216 すずかけの樹の色		施釉　竜泉窯系青磁ヵ 瓦玉系
38	32	24	109	3			表土ハギ		須恵器	甕			12.2～	タタキ後ナデ・タタキ・櫛描波状文	横ナデ 同心円文	2.5Y6/1　黄灰 2.5Y6/2　灰黄	2.5Y6/2 灰黄	石英・長石・1～2㎜の白色粒を含む	
39	34	24	618	3		K・L -12・13			土偶		全長 3.3～	最大幅 (3.0)	厚み 1.7			10YR6/3 にぶい黄橙		長石・石英・角閃石	頭部ヵ 表面に沈線・刺突文
40	37	24	606	3		T11	ローム上		磁器	白磁鉢			1.7～			C-143 銀灰色	C-143 銀灰色		施釉 時期不明

（支脚・石器・石製品）

報番	実測番号	挿図番号	台帳番号	出土地点					器種	石材	法量（mm）				備考
				調査区	遺構	グリッド	層位	取上No.			長さ	幅	厚さ	量（g）	
8	40	15	586	3	SI-001			№4	紡錘車	安山岩	4.8	4.6	1.2	44.6	安山岩製　中央に孔（径7mm）　表裏面にミガキ
11	39	17	633	3	SI-001　竈内				支脚	凝灰岩	29.9	13.7	10.9	1453.4	全面に鉄製のノミによる面取り加工　　加工痕が線状に残る面有 全体に熱を受けているため赤みが強い箇所有　　もろい凝灰岩製
41	ピ38	25	703	2	小Pit埋土中（単層）	M-9			角錐状石器	安山岩	55.0	21.3	11.6	9.14	
42	ピ41	25	630	3		K-13・14	Ⅳ層		石鏃	安山岩	34.9	18.0	4.9	1.72	
43	ピ43	25	118	3		D-13	Ⅲ層		石鏃	安山岩	17.7	18.5	3.0	0.64	
44	ピ35	25	226	1		D-4	Ⅲ層～Ⅳ層		石鏃	黒曜石	16	14.3	2.8	0.39	
45	ピ34	25	300	1		E-5	Ⅳ層		石匙	安山岩	38.7	66.3	8.8	20.75	
46	ピ36	25	001	1			表土ハギ		サイドスクレイパー	黒曜石	57.2	30.1	9.2	11.29	
47	ピ39	25	407	2		T-9	Ⅳ層		石錐	黒曜石	53.8	24.0	5.5	4.79	
48	41	25	539	3		L12	Ⅲ層		石製品		3	1.7	1.1	8.3	円形状にミガキ　孔径0.8～0.4mm　用途不明　装飾品ヵ

図　版

調査区　全景　南上空より

1 区 SI-001 ～ SI-005 完掘状況　東より

1 区 SI-002 竈完掘状況　南東より

2 区 SI-001 生活面完掘状況　南より

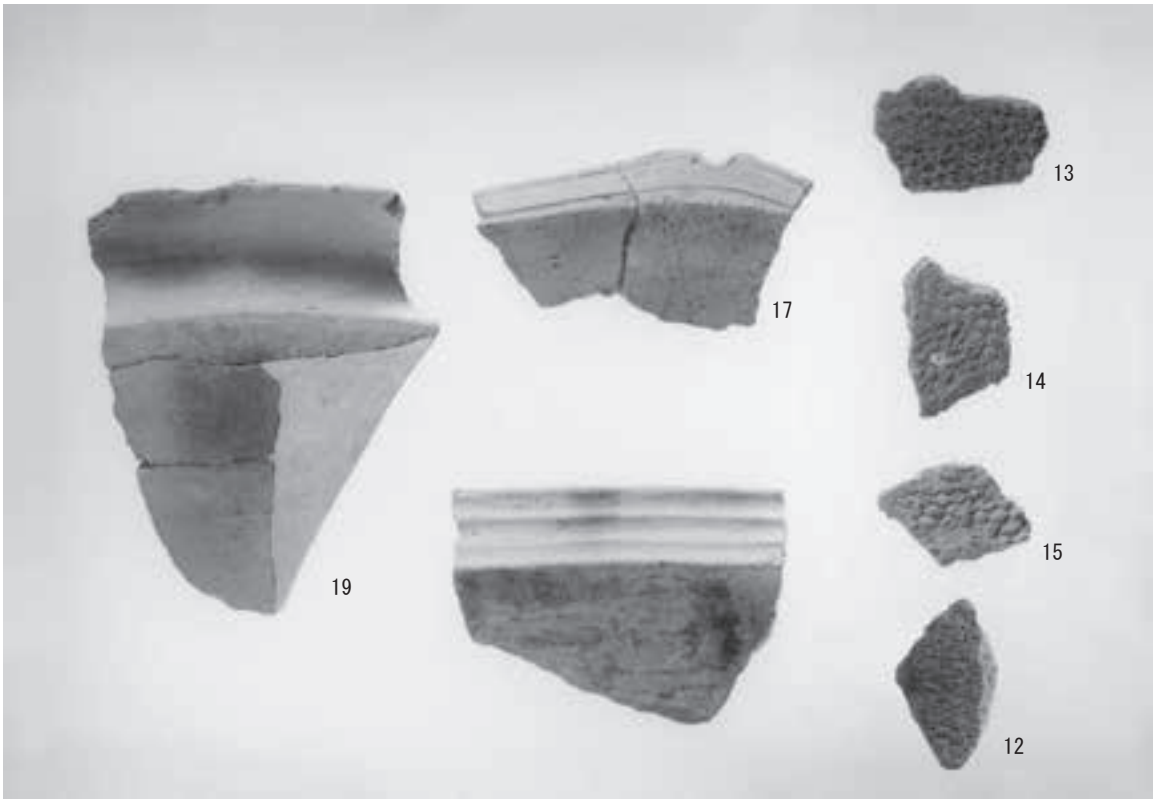
2 区 SI-002 生活面完掘状況　南より

3 区 SI-001 生活面完掘状況　東より

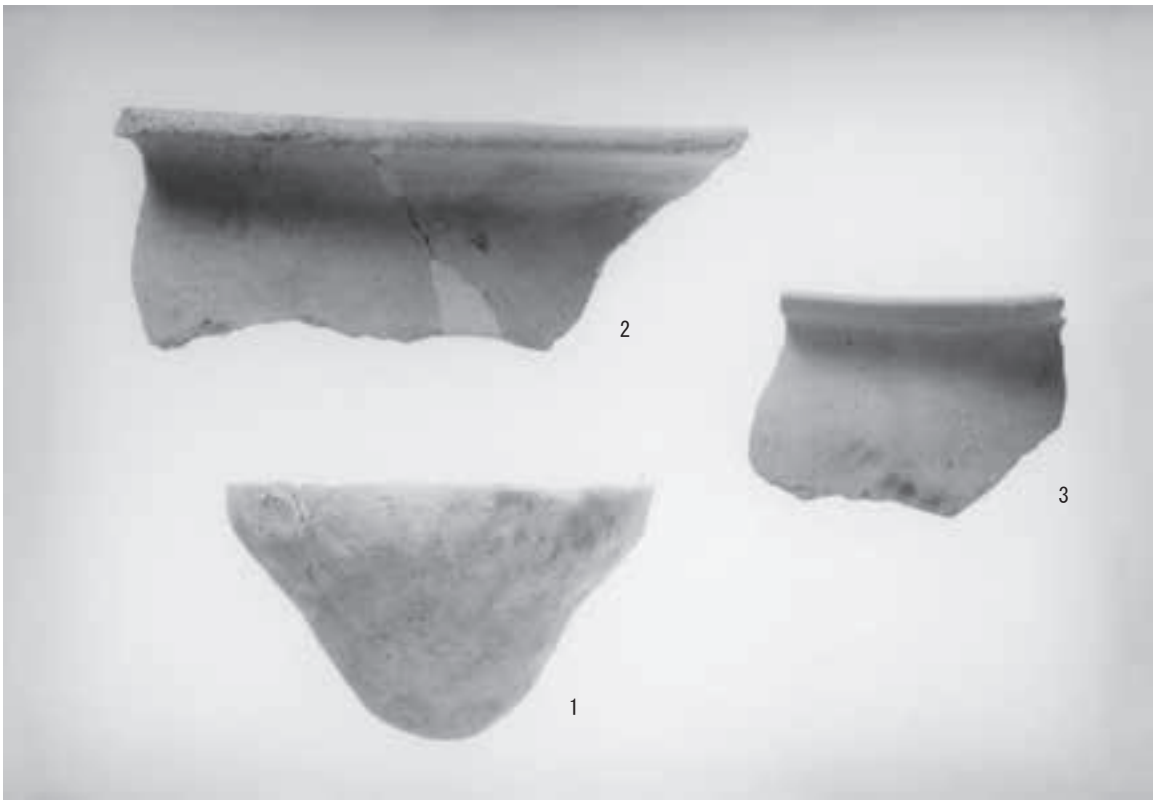
3 区 SI-001 生活面完掘状況　東より

3 区 SI-001 竈最終使用時完掘状況
東南より

3 区円形周溝状遺構完掘状況
北より

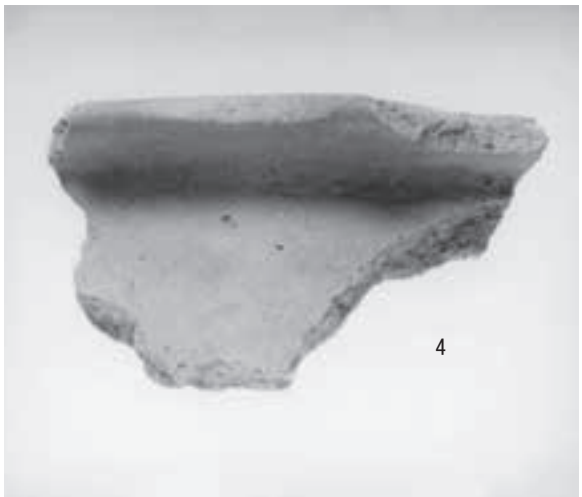


1区出土土器 (1)



1区出土土器 (2)

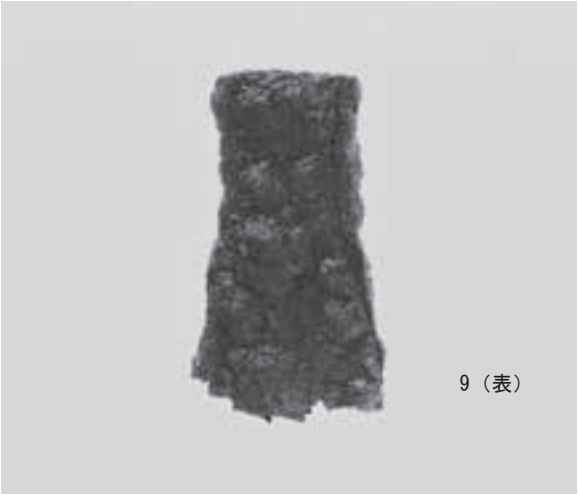
1 区出土土器 (3)

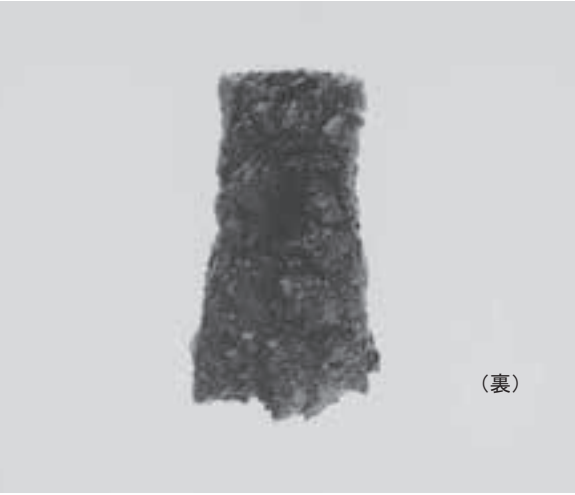


1 区出土土器 (4)

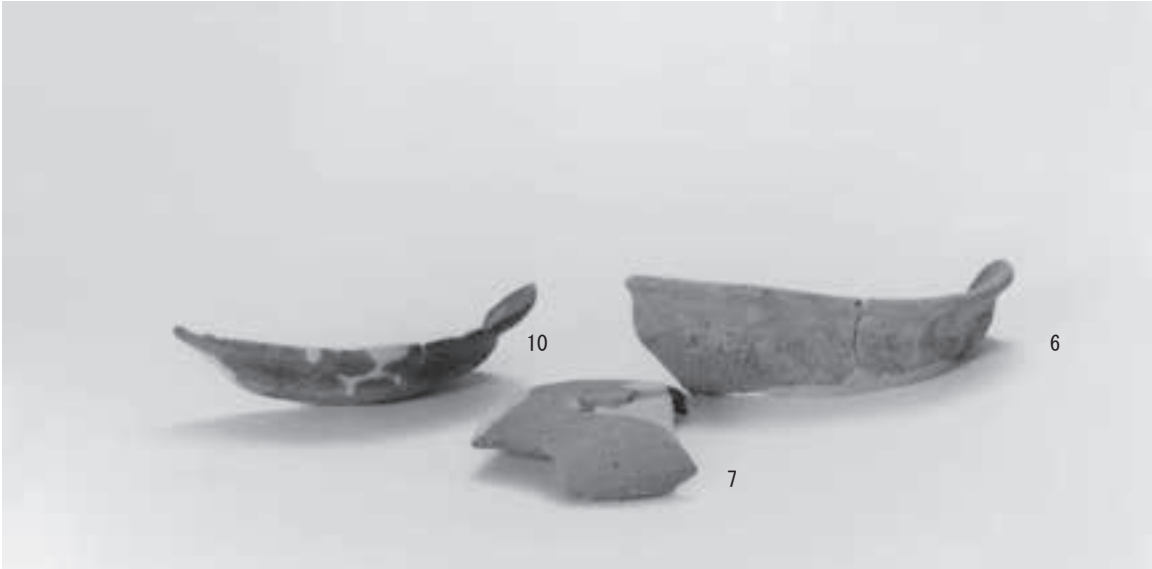
2 区出土土器 (1)

2 区出土土器 (2)



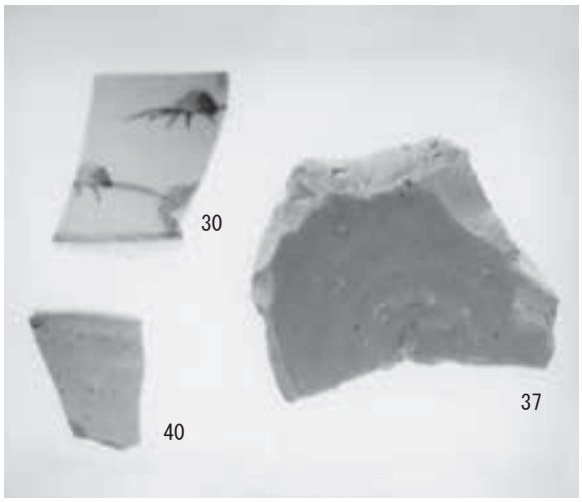


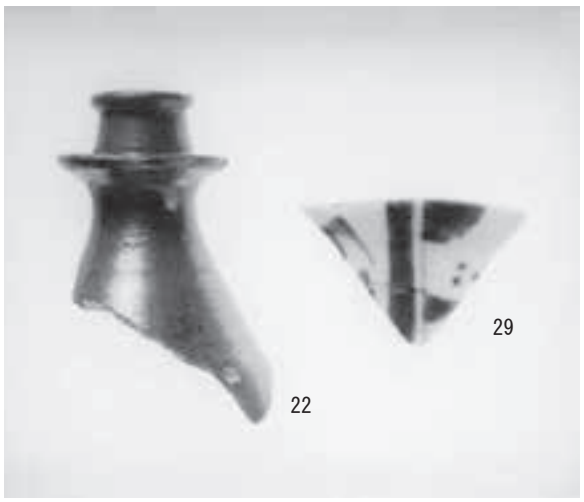
3 区出土鉄斧



3 区出土土器 (1)

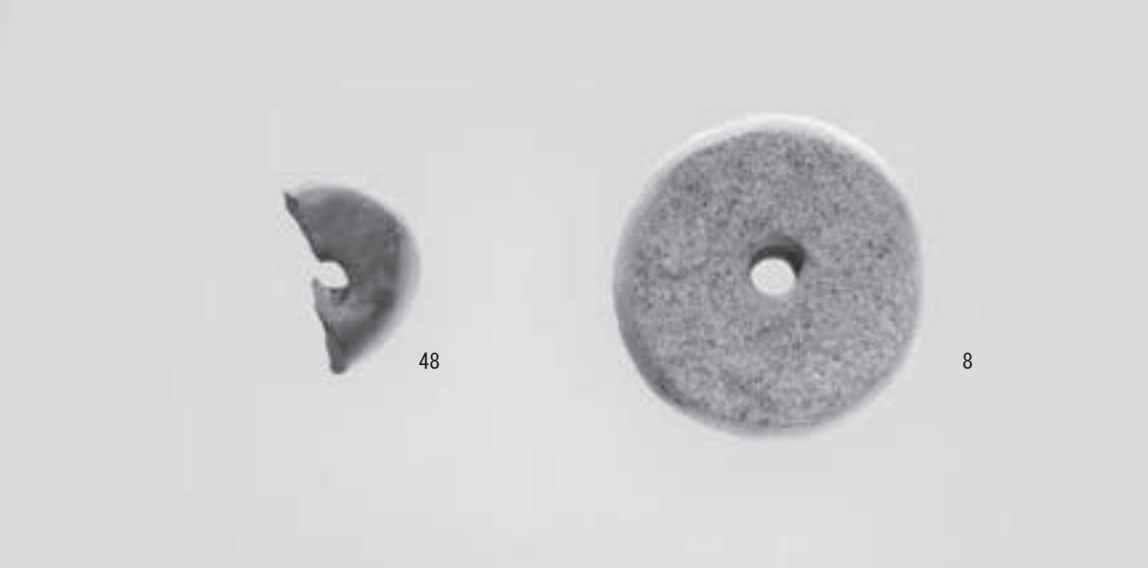
3 区出土土器 (2)



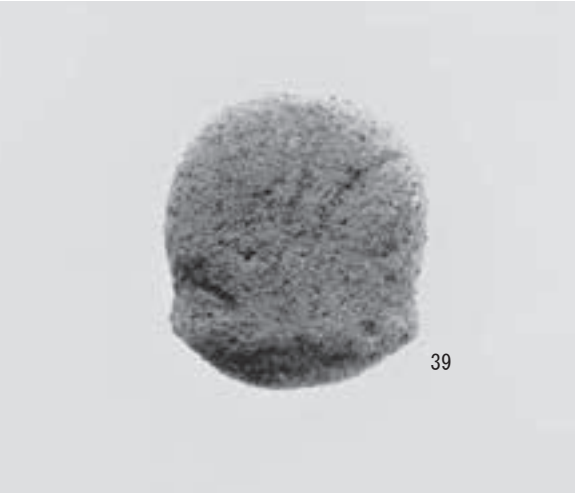


3 区出土陶磁器

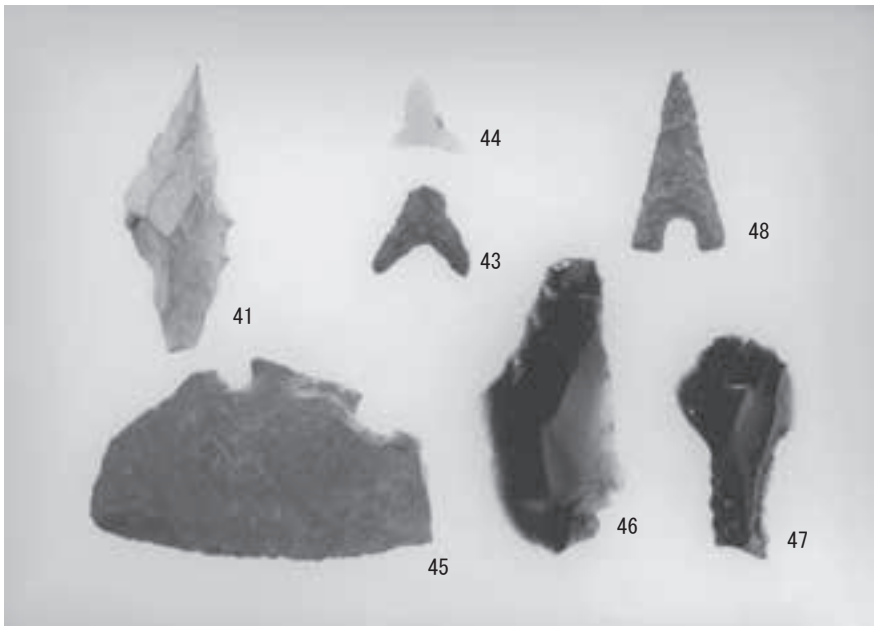
3 区 SI-001 出土竈支脚



3 区出土石製品



3 区出土土偶



1 区～ 3 区出土石器

報告書抄録

ふりがな	のいりいせき
書名	野入遺跡
副書名	県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査
巻次	
シリーズ名	熊本県文化財調査報告
シリーズ番号	第312集
編著者名	山下義満、西住欣一郎
編集機関	熊本県教育委員会
所在地	〒862-8609　熊本県熊本市中央区水前寺6丁目18番1号
発行年月日	2015年3月31日

ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード 市町村	コード 遺跡番号	北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
野入遺跡（のいりいせき）	調査時: 熊本県鹿本郡植木町大字鐙田字野入（くまもとけんかもとぐんうえきまちおおあざあぶみだあざのいり）992、993、994、996、1001 現在:熊本市北区植木町	43201	331	32°87′	130°68′	平成20年11月～平成21年3月	上端1950.3㎡ 下端1857.1㎡	県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
野入遺跡	集落遺跡	古代	竪穴建物跡 掘立柱建物跡	須恵器・土師器	なし
	散布地	縄文時代後・晩期 近世以降	窪地	土器・石器 土偶？	土偶の頭部？ なし

要約	今回、発掘調査を実施した箇所の野入遺跡の中心となるのは、古代の集落跡である。確認した建物跡は、竪穴建物跡と掘立柱建物跡で、これらに付属する遺構も確認した。 この集落の時期は、出土遺物から8世紀前半～後半頃と考えた。 古代の植木地域は、合志郡に属していたが、貞観元年（859）に、山本郡として分離独立した。 今回の野入遺跡の調査成果は、この新たな山本郡設置の以前の植木地域の様相を示す資料の一つである。

熊本県文化財調査報告　第312集

野　入　遺　跡

県道玉名植木線緊急地方道路整備事業に伴う埋蔵文化財発掘調査

平成27年3月31日

編集
発行　熊　本　県　教　育　委　員　会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺6丁目18番1号

印刷　株式会社 林田印刷
〒860-0029　熊本県熊本市中央区米屋町1-9

この電子書籍は、熊本県文化財調査報告第 312 集を底本として作成しました。閲覧を目的としていますので、精確な図版などが必要な場合には底本から引用してください。

底本は、熊本県内の市町村教育委員会と図書館、都道府県の教育委員会と図書館、考古学を教える大学、国立国会図書館などにあります。所蔵状況や利用方法は、直接、各施設にお問い合わせください。

書名：野入遺跡
発行：熊本県教育委員会
〒862-8609　熊本市中央区水前寺 6 丁目 18 番 1 号
電話：　096-383-1111
URL：http://www.pref.kumamoto.jp/
電子書籍制作日：2016 年 9 月 21 日

なお、熊本県文化財保護協会が底本を頒布している場合があります。詳しくは熊本県文化財保護協会にお問い合わせください。

熊本県文化財保護協会
URL：http://www.kumamoto-bunho.jp/